

三矢重松 著
〔言語誌叢刊〕

莊內語及語釋

附
莊內方言
放氏家剛太一著
濱藪堀季雄著

刀江書院

目次

莊内語及語釋……………三矢重松(一)

第一 音韻の一……………三

第二 動詞と形容詞の活用……………五

第三 助動詞……………八

第四 濁音(音韻の二)……………七

第五 動詞の相……………二

第六 てにをは……………三〇

第七 てにをはの續……………三六

第八 第六のてにをはの補遺……………五一

第九 音韻の三……………五三

附 莊内語の語釋……………五七

莊内方音攷……………氏家剛太夫天爵(五)

濱 萩……………堀 季雄(七)

莊內語及語釋

三矢重松

莊内語及語釋

三 矢 重 松

- 第一 音韻の一
- 第二 動詞と形容詞の活用
- 第三 助動詞
- 第四 濁音(音韻の二)
- 第五 動詞の相
- 第六 てになは
- 第七 てになはの續
- 第八 第六のてになはの補遺
- 第九 音韻の三
- 附 莊内語の語釋

第一 音韻の一

一 六短母音 日本語の短母韻といへば、アイウエオの五ツに極つて居る様なものだが、莊内では六ツになつて居る。いや通常は矢張り五ツだが、もう一ツ發音することがある。アイウオの

四ツは先づ變りがないとして、問題はエ韻である。五十音のエ列音を標準語でいふと、嘔吐く時の音、エツ／＼のエ、ケンケロ ケツベのケ、何テラ云フ人のテ、應聲ナイの約ネツのネ、一人稱人代名詞平語オレを存在に言ふ時のレ、鹽梅を粗末に言ふ時のアンベのベの様な音であつて、莊内では他處音とか生意氣音として極めて卑しめて居るのである。それで莊内のエ列音は標準語のエ列音とイ列音の中間音を普通の正音として居る。それを他處の人が聞くと、概してイ列音に聞きたる。して見ると、イエ中間音とは言ふものゝ、イ列音に多く傾いて居るに相違ない。即ち莊内音では五ツの短母韻ア、イ、ウ、イエ間韻、オを正則としてゐる外に、標準語のエ韻も時々は發音されるので、普通の日本人より餘計に韻を持つて居る。いはゞ韻が豊富なのである、他處の人は中々このイエの中間韻を出せない。

豊富と言へば結構だが、さして入用もないものだとなれば、贅物邪魔物で感心が出来ない。莊内人の音で一番直りにくいの即ちこのエ列音で、清濁十四行に通するのだから、關係が餘程深い。理窟は單純だが、實習は難儀である。よく正しい他處の人の音を聞き分けるがよい、他處の人といつても、越中・越後から東北の人の音は全く當にならぬ。

莊内の大部分は兎も角イとエと區別してゐるが、酒田附近になると、その區別がなく、前のイエ中間音でイをも兼ねて、イロハにエの字が四ツある事になる。是は北越地方から感染したものだらうと思はれる。豊富な韻が悪くすると、かやうに間違つた事になるのである。

二 複母韻 エエ

標準語の複母韻アイを促めてエエの様にいふ、此のエは莊内音の變則發音即ち標準語のエに近いのだ。デエク 大工、セエヅー 才藏、ノエエ 野合、ケエゲエシイ 甲斐／＼し、ネエ 無い、ヘエ 蠅、シンメエ 新米、レエキ 禮記、など總べて其の通りだから標準語のエ列音を知るには先づ之を手本にするが早い。此の韻は他處にもあるが、關東語で無イをネイといふネなどのエ韻は莊内正則のエ韻即ちイエ中間の者で、反對になつて居る。備中邊のアイの約エアイ即ち大學をデアイガクといふ様なものとも違ふ。

第二 動詞と形容詞の活用

一 動詞の活用

標準語五種活用と文語活用圖六變化の式に倣つて圖を作ると、

四段	上二段	下二段	カ変	サ変
書	起	受	來	爲
第一變化辭	か	き	け	こ
ウナイ	ロナイ	ロウイ	ウナイ	ウナイ
第二	き	け	き	し
		テ		タ
第三	く	きる	ける	くる
		ドモ		する
第四	く	きる	ける	くる
				する
第五	け	きれ	けれ	くれ
		バ		スレ
第六	け	きれ	けれ	くれ
		キロ		セイ

六

まづ斯様になるので、動詞の語尾變化丈では大した違ひは無い。之を説明すると、命令で、上下一段は標準語で、オキロ、ウケロといふ風に言ふのを、オキレ、ウケレといふ。是は九州熊本邊にもある語調だが、頗る聞き苦しい。それで莊内人は之を中々直さぬ。

サ行變格のセは標準語シロだが、セの方が文語に一致して正しいのだ。

助辭バに續く所で、カ行變格のコエバはクレバの訛、サ變のセバ・セエバは四段活の語氣にいふので、理窟はつくが、悪い。

否定 ナイ、想像 ウ、の助動詞に續く第一變化で、サ變のサは四段活に混じかつたので、秋田邊から東北大部分に通ずる語法である。想像の時はサウと越後邊まで言ふ。併し シナイ ショウを正しいとせねばならぬ。

二 形容詞の活用 是は動詞よりも餘計に違ふ。

ク活	シク活	ナ活
善	苦	立派
第一		ナた ララ
第二	く	にで
第三	い	だ
第四	い	ナだ い
第五	ケレ	ナだ レバ

善ケレバ 苦シケレバと活用がなく、エイバ クルシイバといひ、立派ナレバをば 立派ダレバといふ。

連體の立派ナをダといふ、音が段々強くなつたもの。

ナラ・ナラバをダラ・ダラバといふ。

此のナ活は指定助動詞文語ナリの轉化だから、序にその活用を比較して見よう。

文語	標準語	莊内語
な ら	な ら	な ら
に	で	で
なり	だ	だ
なる	な (の)	だ (の)
なれ	な れ	だ れ

第三 助動詞

自分は國語を名詞、代名詞、動詞、形容詞、接續詞、感動詞の七獨立詞と 助動詞、天爾乎波の二附屬辭とに分けてゐる。今は、附屬辭の事をいふのであるが、其の中で動詞に附く助動詞から始める。

一 打消 にはズとナイとあつて、標準語では兩方混せてゐる。元はズは上方・西南、ナイは關東・東北の語であるが、今は双方互に入り交つて一方を取る譯には行かん様になつて來た。それが莊内ではナイの一點張、動詞の第一變化に附いて、ク活に活く、その附屬辭も少々細に書いて見よう。

降らなく(デ)
(なく)

ない
(ね)

シ デ バ ドモ カ ケ

ガラウ テ(デ) ヤ ゾズ テバ(ノニ)

ト スケ チャ ナ(ノ) ノウ ニイ

テエ トモ

なけれ

- (1) 雨降ら^{なぐで}ね^エ (雨がフラ^{ナクテ}困^ルル)
- (2) もう雪が降ら^{なぐ}ね^エなつた (モウ雪モ降ラ^{ナイ様ニ}ナツタ)
- (3) 雨も降らね^エし雪も降らね^エ (雨モフラ^{ナイ}シ雪モフラ^{ナイ})
- (4) 雨降らね^エば出懸けろう (雨フラ^{ナケレ}バ出カケヨウ)
- (5) 雨は降らね^エども危い空だ (雨ハフラ^{ナイ}ケレドモ^{ナイ}危イ空ダ)
- (6) 雨降らね^エか (雨フラ^{ナイカ})
- (7) 雨ふらね^エけ (雨フラ^{ナカツタ}ナンダ、ザツタ)

- (8) 雨ふらね^エんで^エろう (雨フラ^{〔シ〕}ナイ^{〔タ〕}ラウ)
- (9) 雨ふらね^エで^エことあ^{〔テ〕}んめ^{〔イ〕}い (雨フラ^{〔シ〕}ナイ^{〔トイ〕}ツテ^{〔コト〕}アルマイ)
- (10) 雨ふらね^エや 雨フラ^{〔シ〕}ナイ^{〔ヤ〕}ヤは^{〔イ〕}感^{〔ク〕}歎^{〔ン〕}
- (11) 雨ふらね^エ (雨^{〔シ〕}フラ^{〔ナイ〕}〔ゼ〕)
- (12) 雨ふらね^エで^エば傘^{〔シ〕}など持^{〔ツ〕}つて (雨フラ^{〔シ〕}ナイ^{〔ツツエ〕}〔バ〕 傘^{〔シ〕}ナド持^{〔ツ〕}つて)
- (13) 雨など降^{〔シ〕}らね^エで^エば (雨^{〔シ〕}ナンカフラ^{〔ナイツツエ〕}〔バ〕)
- (14) 雨ふらね^エと^{〔シ〕}好^{〔イ〕}い^{〔ド〕}もの^{〔ウ〕} (雨^{〔シ〕}ガフラ^{〔ナイ〕}ト^{〔エ〕}イ^{〔ガ〕}〔ナア〕)
- (15) 雨ふらね^エす^{〔シ〕}け^{〔イ〕}好^{〔イ〕}い^{〔ド〕}も^{〔ウ〕} (雨^{〔シ〕}フラ^{〔ナイ〕}カ^{〔ラ〕}エ^{〔イ〕}〔ガレドモ〕)
- (16) 雨などふらね^エ (雨^{〔シ〕}ナンカフラ^{〔ナイ〕}〔テ〕〔チャ〕)
- (17) こげ曇^{〔シ〕}つて居^{〔テ〕}て降^{〔シ〕}らね^エな^{〔デ〕}エ^{〔ロウ〕}う^{〔カ〕} (コン^{〔シ〕}ナニ曇^{〔ツ〕}テ降^{〔ラ〕}〔ナイ〕ノ^{〔ダ〕}ラ^{〔ウ〕}カ)
- (18) 大丈夫降^{〔シ〕}らね^エ (大^{〔シ〕}丈夫^{〔フ〕}フラ^{〔シ〕}ナイ^{〔トモ〕})
- (19) 雨ふらね^エ (雨^{〔シ〕}フラ^{〔ナイ〕}〔ツツエ〕)
- (20) 雨ふらね^エ (雨^{〔シ〕}フラ^{〔ナイ〕}〔ナア〕)

フラナケレバといふ様な語は、もし使ふ人が有つても正則の莊内語でない。(1)のネエデのデは(9)(16)のデより鼻音を帯びて居て意義も違ふ。(9)のデはト云フ・テフの約で「何^{なん}デゴンダ」などの様に濁らない事も多い。(3)のネエシは中止だが、終止に用ゐれば斷定を婉曲に言ふ半敬語となる。(5)の所でガ・ケレドモを莊内では使はないことに注意せねばならぬ。ガは稀に言ふ人がある様だが、半分四分一である。(7)のケエは今の東京邊の語ではタツケとタに續けて用ゐるばかりで、動詞 形容詞にすぐに付けるのは東北の方に限る。が是は唯一の過去辭で學問上よほど貴重な語である。(8)のネエンのシはノの變化とも見られるが、たゞ音便だらうと思ふ。

(11)のズ・ゾ・ジエは指定のゾ、(12)(13)のネエデバは東京語のナイツツエバ即ちナイト云へ九州邊のシチフニと同じく逆説の語だが用方が餘程廣く、打消を強くする一種の語法となつて居る。(15)のネエスケのスケは、又サケ・ハケなどゝも言ふ。問^{あひだ}の意^{さかひ}の堺^{さかひ}の轉訛である。此は莊内に限らず随分廣く用ゐられる。(16)のネエチャはナイチャにてヤは親愛の意がある。そのデはデバに近く幾分論ず様な意もある。(18)のテエは然^{しか}ダツツエ^{〔シ〕}などいふテエで、本當のエ列音、(19)のテはイエ中間の莊内流のエ列音(文字の右下に小さくエと記したのは皆思ひ切つた

エ列音を表はすつもり)。

サ行變格の打消はサナイともシナイともいふ、そのサは四段活の様に、シは上一段活の様に投つたのである。

二 想像 は、ウとロウとの二ツで、ウは四段活、カサ變格のロウは其の他の活用の第一變化に附く。標準語のウ・ヨウと同じに活用はない。

行がう (エゴ) 返さう (ケエツ) 習はう (ナラオ) 來う (コ) 爲う (ソ) 起ざろう (オギロ) 忘れろ (ワスレロ)

此のオ列長音に言ふべき所を短音にいふので分りにくくなる。ヨウをロウといふのは田舎語の重くるしい所、東京語に命令のヨをロといふも是だ。

附屬辭は前のナイのと大低同じだが、ケ ト ナ タラウ丈は附かない。

(1) 御前も行(がう)ばおれえ己も行(がう)(お前モ行クナラオレモ行カウ)

(2) えごでく (行カウツエバく)

(3) おら行こや (私行カウ)

(4) おらけえろちや (私歸ラウ)

(5) えごでく (行カウヨく)

(6) 行つてこ (行ツテ(來ウ)(食ハル))

(7) 行(がう)(こん)であんめえか (行カウチャアルマイカ)

想像の前提法の (1) は随分面白い。東京語で行カウナラといふ様な語もないではないが、まづく 珍しい方。(2) はとても他處人には分るまい。(5) のデは前の打消の (16) のだが、此處では多少勸誘の意を持つてゐる。これが他處人にはエゴデゴデンと聞えるなどは妙だ。(6) の來ウとクハウは一つになるなどは感心しない。

ダラウのデエロウ・デエロは指定ダの想像だから別言はない。

三 打消の想像 マイのメエは想像の打消ともいはれる。

四段カサ變格は其の想像形にあるのみ (第三變化に) 上下一段活は第一變化に附く、活用のことは標準語も同じ。

行(がう)めえ 來(う)めえ (さう)めえ

落ちめ^エ 流れめ^エ あるめ^エ

此の想像形にマイを附けるのは二重の想像になつて可笑しいことだが、言語にはあることで、越前その他の地方も同例になつて居る。第三變化の轉音ではない。

附屬辭は打消ナイのと大低同じだが、バ ケ ダラウ ト ナの五ツは附かない。バと附かないのは標準語にマイナラバと言はないのと同じ理窟。

四 打消の命令即ち禁止 ナが第三變化に附くことは文語標準語も同じこと、しかし其の上のル音がすべて撥ねる。

取^ルな 起^キな 忘^ワるな 來^クな 爲^スな

此のンが又無くなると、上方の オキナ ワスレナ 負ケナ等となるのであるが、ナの反對に急強音のトやカに續く時は皆促音となる。これは序にいふのだが、學問上にも有益な現象である。

取^ルど (どて) 起^キッど^ッ 忘^ワれ^レッど^ッとわりい 來^クッど^ッ 爲^スッど^ッ

ナには デ ヤ デ バ ヨなどが附く。

五 希望 タイは第二變化に附く、デエと發音するは例の通、ク活で、附屬辭を始め總べてナイと同じだ。

おれ戀は 行^ユぎでエどもがし 降る雪の 積る思を 知らせでエちやほに

六 完了 タは略標準語と同じだ。活用は良行變格の變。

た^チら^ウ たり た^タえ^バ

(1) どうし たら よが^ラ

(2) おめ^エも見で^エらう (オマヘモ見タラウ)

(3) もう行^イつて^エらう (行^イッタラウ)

(4) 見だり賞めだり三文のビイドロ

(5) どうしたばや (ドウシタト云フンダ)

(6) 日イ暮れだ^レ (えば寒くなつた (日が暮レタラ寒クナッタ)

タの附屬辭は打消ナイのと同じだ。(6)の文を東京邊では(1)と同じにタラと假定に言つて確定と區別がないが、是は莊内語の方が精密だ。(尤も莊内もタラとも言ふ)

七 過去 ケエ今の國語には過去辭といふものが無く、皆完了のタを代用してゐるが、實に不精確だ。此のケエは文語のキに當るので大切なものだが、日増しに東京邊でも減つて行くのは惜しい心地がする。第三變化に附いて活用はない。附屬辭は前のナイの中で バ ケ ヤ ト ナ が附かない。

あの人おれ所叩ぐけエ(アノ人我ヲ叩キ、)

そだけエ(然ナリキ)

なんにもねエけエ(何も無カリキ)

見でエけエども見ねエで來た(見タリシカドモ見ズシテ來タリ)

此の過去辭は外であつた事を此處に持つて來て噂をする様な語氣がある。是はことに注意すべきことで、文語のキ・シ・シカもさうだ。

レル ラレル セル サセルのことは少し長くなるから、別に「相」といふ題でいふことにする。指定のダは前述により略して、助動詞は一先づ完結。

第四 濁 音 (音韻の二)

一 語中の濁音

莊内語では單語の中・末にあるカ・タ行の音は皆濁つてガ・ダ行となる。

かがねエ(書カナイ) かぎそぐねる(書キノネル) かぐ(書ク 角) かげ(書ケ 缺) あぎ

(秋 明 飽) 落ちる 持つ 勝たう 待て もでる(優待 持テル) みなど(港) かたな

(刀) はづる(果) しで(仕手) もづ(餅)

テ タラ タリ タ タレも濁る。

是は發音の上ばかりではなく、書く上でも教育の不充分な人はわざ／＼濁點を打つのである。それで正しい濁音をば鼻音的に一層軟に發音する。

あががね(銅) くだぐ(碎) はぢ(耻) まづ(先) ゆでる(茹) まどふ(惑)

此等は關東・東北一般に似寄つて居るが、西南・九州地方に比べると著しい違がある。例の鼻にかゝるといふのも此等の場合によく現れる。モデル(模型)などを モンデイルといふ様に調子か

ら違へていふので東京邊にも通じ兼ねる事があるので、本當の濁音はアガガネ(銅)の上のガの音で下のガは正しいのではない。アカガネと下のガをアガのガの様に發音すれば始めて正しくなるのである。しかし最上國分云、新庄町、山形市・米澤地方の様にイク(行)をエグと鼻濁に言はない所は莊内の幸福である。此の鼻濁言が福島・茨城地方に來ると鼻音が脱けて反對に酷く剛ばつた音になる。それも實に聞き苦しい。

單語の中・下に在つても濁らないものがある。

サンクワン(參觀) ケンタウ(見當) イッカ(一箇) ロッキ(六騎) ハッケ(八卦) おっかない(可恐)

などは上に撥ねる音と促る音とあるから標準語と同じく決して濁らない。此の外に前の原則によつて當然濁り相で濁らない取除が少々ある。

すてる(捨) すたる(廢) ふてる(拗) もち(稿) ほじくる(掘穿) おちける(畏怖) たすかる(助) ばき(河骨) をこる(子供を叱る) 姉こ おちこ(弟)

此等は上の音が強く清んで居るか、アクセントがあるか、促音らしいか、又は成熟音が別にな

つてゐる様に思はれるか、當の音が接尾語で離されるものに因るのであつて、最初の原則を動かすには及ばない。

二 正濁と鼻濁

東北・關東には鼻濁が多く、語の中・末には殆んど正濁がない位である。之を莊内音で説明すれば次の様に、

正——がく(樂) ぎろん(議論) ぐるく(廻るく) げた(下駄) ごく(極)

鼻——かが(加賀) かぎ(鍵) とぐ(研) まげる(曲) こぐ(漕)

正——ざしき(座敷) じぶん(自分) するい(狡) ぜに(錢) ぞんず(存)

鼻——かざみ(風見) にじ(虹) 論ず はぜ(沙魚) ぐんぞ(河魚ノ一種ノ名)

正——だるま(達磨) ちしん(地震) づぐる(造) でる(出) どろ(泥)

鼻——やまだ(山田) はぢ(耻) くづ(屑) たで(蓼) かど(角)

バ行 ギヤ行 ジャ チャ ビヤ行も皆此の通であるから莊内の鼻聲を直す事は此の點にもよく注意せねばならぬ。

三 語頭の濁音 は純正な國語には無いのであるが、標準語にも多少此の訛がある。カマ(蒲)

をガマ、カラ（柄）をガラ、カケ（崖）をガケ、摩ルをズル、スハエ（楚）をズハエ、タルイ（緩馳）をダルイ、タム（訛濁）をダムといふ類、特に形容言に多い。しかし莊内語・東北語になると随分酷い。

ガズ カカは母の義、轉じて妻を指すを、ガズと濁つて母にいふ。

ダズ ト、は父にて夫をも指すを、ダズと轉じ濁つて父にいふ。

ゲエル 蛙を訛り濁りてゲエルといふ。ゲエルゲエドのゲエドは何だらう。

ヅグル 人を打擲し苛むをヅクルといふのはツクル（造）で躑けて人に造る、即ち今の所謂制裁スルに當る。

裁スルに當る。

ガニ ガニモリ 濱語國分云、海岸の漁民などに蟹をガニといひ、一般にガウナ（宿カリ）をガニモリと

いふのも蟹守の意味だらう。

ゴネル コネルの訛。

ガウ 圍ふ、前を掩ふことをいふ。

ガッチアフ カチアフの訛。

まづこんな具合だが、中には又反對にホトンドを濁らずにホトントといつたり、ズルイの本語スルイを遅緩の意義に使つたりするものもある。

第五 動詞の相

一 被役相（受身） 標準語では四段活はレル（下一）、其の外の活用はラレルをいづれも第一變化に附けるが、莊内語も同様だ。しかし其のレル・ラレルをエル・ラエルとヤ行下一段にいふ方が多い。

褒ら	叱ら	第一變化屬辭			
らえ	れ れロイ えマイ サセル	第二	第三	第四	第五
られ	れ え	れる ドモ ナ	れる ト	れれ えれ バ	れれ えれ ヨ
らえ	られ タ	らえる チヤ シ テエ バ	られる ナ（ノ） ゾ	らえる ダロウ	らえれ られ ヤ

此のラ行音がヤ行音に變るのは奈良時代に専ら行はれた語法で誠に床しい心持がする。一體ラ行とヤ行は極近い音だが、ラ行の方は硬く、ヤ行のは軟で優美である。東京邊のラ行は餘程英語のRに近く、卷古に強くベランメエなど云ふのは實に卑しい。といつて又米澤や薩摩邊の様に餘りヤ行に近くいふのも聞き分けにくい。莊内では此の助動詞の外はラ行をヤ行にいふことはない様だ。(カ行變格の 來えバ を除いて)。

そげだ事すつると叱らえるぞ (ソシナ事スルト叱ラレルゾ)

さうさえでは困るちや (サウセラレテハ困ルテ)

サ行變格の第一變化は四段活に準ずるので (第一回既説) 他處の様にセラレルとかシラレルとかいふことは全くない。

昨日は人來らえで何も出來ながつた (昨日ハ人ニ來ラレテ何モ出來ナカツタ)

でえじの書物虫かえた (大事ノ書物ガ虫ニ食ハレタ)

クワレタを クワエダ カエダといひ、それに標的名詞に添へるニ・カを略すと來ては成る程分らない譯だ。

此の標的語のニを略すことは東京語にも外にもあることだが、本はニをシと撥ねたのを、又其のハネを略したので、人_ニ來ラレル 虫_ニ食ハレルの様にいふことも多い。

二 可能相 は (甲) 受身と同形、是は文語も標準口語も同じことだが、今ひとつ他の (乙) の形がある。

(イ) 四段活が下一段になる。

書けナイ けテ けるドモ けるカ けれバ

(ロ) 上下一段カ變の被役形のラを略す。

起き 受け(ラ)れ 來 (ラ)え	ナイ	れ タ	れる ドモ	れる カ	れれバ えれバ
------------------------	----	--------	----------	---------	------------

カ、ル、をカケルといふのは標準語にもあるが、音調が大きく違ふ。標準語では カケル カケナイ 皆音調を平に 懸ケル 懸ケナイの様にいふが、莊内では カアケエル カアケエネエと上下カ・ケに調子を附ける。(ロ)の方は標準語には取られない。そしてコエルは又ケイルとも

ケルとも言つて、食へるの約のケルと同じになる。

標準語では可能相の標準語にはガ・ハ・モなど附くが、莊内では其のガを言はない所は一般の主格名詞と同じだ。それから可能相の(甲)(乙)の二つの形は用法に違ひがないかといふと、少々ある。一體動作が只出来る意味なのは普通の可能で、自然にさうなるとか、せずに居られないといふ様なのは自然的可能といつて區別するのだが、(乙)の形は一體に其の自然的可能の方に用ゐられる。是は標準語でも其の傾向になつて居るが、莊内語は特に著しい。随つて(乙)の形は話者即ち一人稱に用ゐる場合が少くなるのである。

子供でも讀める 自然的、一般

おれえでも讀まえる (私デモ讀マレル) 特殊の場合

坊っちや雜魚釣れっがい (坊ッチャン雜魚が釣ラレルカ)

是は普通可能でツレルのツにアクセントがある。自然的可能(漁アルカ)の時は ツが平坦、レにアクセントが附く傾向で東京のツレルカに大抵似る。

おめえせっがい (御前サレルカ)

せつてえし (サレマストモ) 自然的可能に近く一般の能力についていふ。

さえつてえし (サレマストモ) 特別に直ちに動作をやり得る語氣がある。

三 使役相 は標準語と同じくサ行下一段に轉活するのであるが、第六變化が例によつて違ふ。

爲 ^讀 ま		起 ^き	
第一	ナ ロウ マイ	せ ラ レル	さ せ
第二	テ	せ タ	さ せ
第三	ド モ ナ ケ シ ヤ	せる シ ヤ テ エ バ	さ せる
第四	ナ カ ト	せる ゾ ダ ラ ウ	さ せる
第五	せ れ バ	せ れ	さ せ れ
第六	せ れ ヤ ヨ	せ れ	さ せ れ

此の外に標準語には四段に活く所のヨマサウ ヨマシテ ヨマスといふ様な語法も混せて用ゐられるが、莊内にはない。是は少し氣が利かない様な心持のする場合もあるが、規則正しい所は好いのである。所がこゝに著しい訛も行はれて居る。それはサセルをラセルといふのである。(莊内の外にも少々此の語法を用ゐる所がある)

弓を射らせねえ (射サセナイ)

覺えらせでんだへえ(覺エサセテクダサイ)

來らせる。受けらせればえいが。

是は實に聞き苦しい。教育の任に居る方々には特に直す様に御注意が願はしいのである。

四 敬相 には三種ある。

(甲) 御(第二變化ノ動詞)ナハル、標準語のナサルがナハルと變つて、ナハラ リッ ンル^② ルッ レ

御歸^けなは(ら)ねば分りましたね(御歸りナサラネバ分リマセン)

御げえなはでくだへえ(御替ヘナサッテ下サイ)

御げえなはんで^えらう(御^{カヘ}リナサルダラウ)

御げえなはつどき一寸(御カヘリナサル時一寸)

御げえなはれば分る(御カヘリナサレバ分ル)

御げえなはりましたよ(御^{カヘ}リナサイマセ)

第二變化のナハリにマセのマシヨを附けて命令法を表すのであるから第六變化のナハレは用ゐ

んでも濟むのである。此の(甲)の形式は 御覽 御メン オ上リ オ休ミ等丁寧な場合に用ふ。
百姓などは固より言はない。

(乙) 使役形 文語のセラル・サセラルで、口語に約つてシヤル・サッシヤルとなつた者が、
莊内ではハル・サハルといふ。

爲 ^讀 ま 起 ^き き 見 ^み 見	はら さ はら さ	シ タ シ ナイ	はる はる さ はる	はる はる さ はる	へえ へえ さ へえ	へえ へえ さ へえ
	カ	タ	ドモ	カ	パ	ヨ

もうけえらはらう(モウ歸ラッシヤラウ)

見さはらうば見せ申さう(御覽ナサルナラ御見セ申サウ)

今日の新聞見さしたが(今日ノ新聞見サシヤッタカ)

此のシヤルの第二變化がシとなるのは餘り違ふ様だが、シヤッテ・シヤッタがシッテ・シッタとなり、それがシテ・シタとなつたので決して疑がない。

まだ見さしめえ(マダ御覽ナサルマイ)

遊ばしねえが(御遊ビナサランカ)

ナイ・マイが第二變化につく所は大きに變例であるが、サ行變格に混じたのであらう。

旦那はん明日東京さえがはると(旦那サンアス東京へ行カッシャルト)

なしてえがはんでえらう(ナゼ行カッシャルグラウ)

早く御座へえばえいども(早く御座ラッシャルバ好イガ)

よく見さへえ(ヨク見サッシャイ)

へエはハレの約、此の(乙)種は莊内中一般に言ふ最も普通の敬語である。

(丙) 被役形 は家中國分云、昔の武士階級など上流の男子の語で(乙)式を少し粗末にいふのである。

女や百姓・町人は使はない。

おめえ勉強さえたがで(君勉強ナスツタカネ)

どうも勉強さえめえ(ドウモ勉強ナサルマイ)

度々曰はえんども分らねえ(度々イハレルケレドモ分ラン)

誰某は何時來らえつか分らえたらをせで下へちや(誰某ハイツコラレルカ分ラレタラ教ヘテ下サ

イナ)

誰某はん早く行かえれば好いなだけもの(誰某サン早く行カレバ御出ナサレバヨイノダツタモノ)

第六變化の命令法は使はない。(中國邊には見ラレイ・セラレイとナサイの代りに用ゐる。)

酒田語に

上さませ(上ラッシャリマセ)

御座さませ(ゴザラッシャリマセ)

などいふことがある。(今は少くなつたらう)此のサマセはシャリマセの約音で動詞の語尾ラを略したもの、見サッシャリマセの約 見ササンセなど、同類である。一體酒田には大阪上方系の語が餘程入つて居る。

敬語についてはもつと言はねばならんことがあるけれども、他日に譲つて、今は他の動作を尊敬する敬相文に止めておく。

第六 てにをは

テニヲハの事は第三の助動詞の附屬辭の所に一寸言つたけれども、今は改めて言ふ。少しは重なる所があるかも知れぬ。テニヲハは通例三種に分けるが、今は便利の爲四種に分けて見ると、

第一種 名詞・代名詞や其の資格の詞に附く者

が のな に を さ と で より から まで

第二種 動詞や用言に附く者

て つゝ ば ど ども し

第三種 色々の詞に附く者

は も こ そ ばかり さへ でも やか のう

第四種 語句や文の終止したのに附く者

や か よ は じ さ ぞ(ぜす) と て で ちや のう

となる。是から順に説明しよう。

(1) が (以下第一種) 主格にガの附くことは國語一般の通則だが、莊内では附かない方が本則で、附くのは餘程特別の場合である。此は文語と同じで、日本語としては少しも差支ないが、しかし其丈いかにも語が流暢でない。ガは語をさへさせる辭である。

おれ言た事分ッが(私が言ッタコト分ルカ)

暇なぐで困る(ヒマが無クテ困ル)

天氣えいと氣持えいの(天氣ガエイト氣持ガエイネ)

(2) の (な) 領格にノの附く事は文語口語の通則だが、莊内では之を附けないことが多い。それで熟語にしたのでもない。

權兵衛おやぢ病氣だ風だ(權兵衛ノ親父が病氣ダ相ダ)

おめエ内(家)の僕つら餘ッ程雅だのう(君ノ内ノ下僕ノ顔ハヨホド變ダネ)

わア事さねエで人さばかりへかやく(我が事ヲシナイデ人へバカリ小癪に世話ヤク)

領格の下に名詞を略す場合にはノがナとなる。動詞・形容詞の連體形が名詞となる時もナを添

へる。

これ誰なだ(コレハタレノダ)

内で着んなは悪いな、外サえぐ時んな好いな。(内デ着ルノハ悪イノ、外ヘ行ク時ノ(ノ)ハ好イノ)

おめエンなひでいなだの(御前ノヤリカタハ酷イノダネ)

(3)に は何も變つた事はないが、時々撥音ン長音イに變り、又は略される。

そげだ事して何^{○イ}なる(ソシナ事シテ何ニナル)

あの納豆賣巡查なつたど(アノ納豆賣巡查ニナッタト)

(4)を はニよりも略されるのが普通で、用ゐる事は減多にない。

お茶上らへエ(オ茶ヲ御上リナサイ)

お飯食ふ、字^イ書く、書物さく、

(5)さ へをさといふは東北一般の通則、九州邊ではサンと撥ねていふ。サは様の變サンの約で、方角^{かたむき}方様を指す語である。で方邊をへといふと同じことだが、今は田舎語となつてしまつ

た。さて文にはニといふ所をへともサともいふのは和げて大凡にいふのである。

何處さ行く、車さ乗る、人さ遣る、左さ向く、人さ賣^{ノエス}僧こく(人へ諂フ)、酒さ水わる、

上流の人はへともいふが、莊内語の本則でない。

(6)と 濁つてドといふ外は違はない。

人どつきあふ、何と思ふ、酒ど煙草は止めた。

(7)で (8)より (9)から (10)まで 何れも東京語と違ひはない。多分全國何處で

も同じだらうと思ふ。

(11)て (以下第二種)動詞・形容詞の第二變化に附くこと東京語と同じだが、例の如く書イデ 好グデなどゝ濁る。

(12)つ、 テ居テ ナガラの意味に用ゐるのは少し上流の特殊の人の語でもあらう。

知りつゝ言はない。現に取りつゝ取らね^{エツ}テ強情張る。

(13)ば 動詞の第五變化、形容詞・助動詞の第三變化について前提法を作る。

雨降れば好い

さうせば出来る(サウスレバ出来る) 品好いば高いでも買ふ(品が好ケレバ高クテモ買フ
心せ立派だばぼろ着ても耻しくね(心サへ立派ナラボロ着テモ耻シクナイ)

死のば「死ナウバ」死ね(死ヌナラ死ネ 死にでば死ね(死ニタケレバ死ネ)

おれ行つたば逃げたけ(オレ行ツタレバ逃ゲタツケ)

おれ行つたらうば逃げんで(オレ行ツタラ逃ゲルダラウ)

バの下に 好カラウ 好イカ等の意を含んで人に相談し指示を仰ぐ意味の疑問ともなる。

どうせば(ドウシヨウ||ドウシタラ好カラウ)

今度何時来え(来ヨウ||来タラ好イカ)

此が轉じては 御前ドウスル お前此度何時来ルといふ疑問にもなる。想像に附いたバは下に語を略して反語にもなる。

誰死なうば ダレ死ヌモノカ)

誰氣持好からうば(好イモンカ)

此は 死ナバコン 好カラバコンなどいふ文語と同じ性質である。又疑問文の終止したのに附

いたと見られる一種の用法がある。存在だ(ぞんざい)が親んだ語である。

兎々なして耳長(ナガ)いば(何故耳ガ長イノダ)

何處(どこ)いて(何處が痛イノ―痛イト云フ―痛クテサウ泣クノ)

何だば(何ダネ―何ダヨ―如何ナレバ左様ニ云々スル)

テバはト云ヘバの約で、ト云フノニと同じ義である。關東・東北の語だが古くは歌にもある。

雨降るでば傘(かさ)もさゝね(雨フル(ツテヘハ)傘モサ、ナイデ)

行くでば黙(だま)つて居ても(行クツタイフノニ黙ツテキテモ)

下の語句を略すと キット然様ダ 實ニサウダヨの義になる。

だつてでば(イヤラシイヨ)

さうさえては困るでば(サウスアレハ困ル(ツテバ))

それで莊内にはノニといふ語はなく、皆此のデバで用を足すのである。

おれなの何もさねでば妙に疑ふもののだ(僕ナド何モシナイノニ妙ニ疑フモンダネ)

(14)と 前提法のとで動詞・形容詞や打消指定助動詞の第四變化に付くことは何處も同じこ

とだが、例の如くドと濁る。そしてルといふ動詞の語尾は通例促音に變る。

風吹ぐど波立つ

其處さ居^ゐど邪魔なる

鼻わりいど耳も聞けね^え

さう聽かね^えど何もくんねぞ(サウ聽カナイト何モヤライゾ)

〔注〕 キクが服従の意味になると、クは決して濁らない。それで耳で聽ぐのと分れる所は一
寸面白い。

此の光る奴^{やつ}本當の金だど好いの

(15) ども 文には第五變化に附くが、莊内語では第三變化に附く。是は東北や出雲邊にのみある語法で、外では皆ケレドモといふ。ケレドモのケレは形容詞ク活の語尾で、それを動詞・形容詞・助動詞の終止に附けるは不都合な事、いつそ東北流にドモ文にする方が好いのだけれども、多勢に無勢で敵はないのは致方もない。

麥酒は飲むども日本酒はのまね^え

好いども、欲しいども、そだども、有^うらうども、有んめ^えども、有つたども、有つけ^えども、

〔注〕 シク活の終止は多くシイのイを略して欲し^バトモ 悲し^バトモ といふ様に發音する。

かういふ場合に東京語ではケレドモを少し軽くしてガともいふが、莊内では用ゐない。

序にいふが、此の莊内語を直してケレドモを使ふは可いが、(13)のバにまで及ぼして又文語にも混じて、飲ムカラをノムケレバ、好ケレバ・悪ケレバを好イケレバ・ワルイケレバなど、口にも言ひ筆にも書く人が折々ある。而もそれは中等教育は卒つた人で、傍で聞く身に汗をかいたことが度々ある。

東京語にケレドモガと重ねて使ふことがある。それに似たのは莊内のドモガシである。

あすび行ぎで^えどもがし行がえね^えもの(遊ニ行キタインダケレドモ行カレナイモノ)

おわびしたどもがし聽かしね^えけもの(オ詫シタケレドモオ聽キナサラナカツタンデスヨ)

これはドモガにシを添へたものか、ドモに疑問のガシを添へたものか、一寸判断しかねる。

(16) シ 切れた言葉にシを添へて連用中止として下に並列的に續けることは東京も何處も同じである。

男も来るし女も来る

顔も好いし氣だても好い

第七 てにをはの續

テニヲハを書き足して大骨の完結としませう。莊内中での地方別にして 鶴岡 酒田 松嶺
大鳥 山濱 中川 遊作といふ様な言葉の異同も、家中語國分云、武士階級と土語國分云、商、農、工階級の比較なども
して見たいと思ひますけれど、東京に離れて居ては何分十分な材料を得られせんから、まづ
控へて置きます。

(17) は (以下第三種色々の語に附く者)は事物を取り立てる辭で、通例ヲと轉呼されるが、
莊内では轉呼しないで正しくハと言ふ場合が澤山あるので、國語のはの性質が好く發揮されて

ゐる。それが他所言葉や文章讀みに感化されて次第にワにのみなつて行くのは實に惜しいもので
ある。其の文法上の用法は國語一般と大抵同じである。(例の文にはとあるのは轉呼しないもの
だ)

おらはやんだ(オレワイヤダ)

それはそだども(ソレワサウダケレドモ)

そげエだことしては大變だ(ソナナ事シテワ大變ダ)

さうは思はねども感心もさね

おめエな只是食ふばかりだんだもの(オ前ノ只モウ食フバカリナンドモノ)

えぎでエことは行きでエども先づ止めるでし(行キタイ事ハ行キタイケレドモ先づヤメヨウテ)

どもはく困つた子供だ(ドウモく云々)

そだどもは(又そだどもガシ)仕方ねエもの(サウダケレドモ仕方ナイモノ)

第一のと終の二ツの外はワとも言はれる。ては・にはと續し時に他處の様にチャ・ニヤなど約
ることは無い。をと結合する時はをばとなる事は一般の様だが、最上や九州の一部の様に酒バ飲

ムなど言ふことはない。又形容詞ク・シク活の第二變化に附いて前提法となる。是は文法のバに當る。

好くわどうか御代へなはで（好クワドウヅ御代へナスッテ）

その代りに或る地方の様に恐ラクバ・願ハクバなど余計な濁はしない。

(18) も は婉曲に詠嘆して主に重複を表する辭である。其の用法は全國何處でも違ひがなく、莊内も同様だから略して、

(19) こそ は強く取り立てる。これも全國あまり違ひがない。ぞはコソより少し輕いが、口語では用ゐる場合が餘程少いから、前には擧げなかつたけれども、全くないではない。

これぞと思ふこともない。

遂ぞ聞いた事のね^エごんだ。

(20) ばかり は單一を表す。又、バカシともバリともバシともいふ。大體標準語と違ひはない。

あなたばつかし御座たが（アナタバカリ御出ナサツタカ）

け^エづばりの事出來ね^エが（此奴「コレ」バカリノコト出來ナイカ）

口ばし達者で手は動がね^エ

俗の文語に 心配ばしし給ふな などのバシは別種の接尾語らしい。又

たつたけ^エづばたがて呉れね^エ（只此奴程シカ呉レナイ

こればたけね^エが（コレバカシ食ヘナイカ）

などのバタもバカリと似て居るが、程・位の意味で特に消極の場合にのみ使ふ接尾語で別の物らしい。他處ではバカリをバカ バッカ バアなどとも云ふ。

(21) さへ は通例 ^セと發音する。文語の ^ダニ ^スラに當ることは何處も同じだ。或る所ではサへを シカ、即ち莊内のガテの意に用ゐる處もあるが、莊内の用方は標準語と違ひはない。

(22) でも は文語のニモ ニテモ ナリトモ ^スラ ^ダニなどに當る一種の複合助辭である。

(23) や は呼び掛け、並列し、稀には少し疑ふ。

虎吉や早く來^こでば（虎吉や早く來イッテヘバ）

栗や梨や柿の御馳走

もしや悪^いがつたらと思つて

(24) か がと濁る。疑問

誰が居ね^エが(誰カ居ナイカ)

來^キつがもしんね^エ(クルカモシレナイ)

何處がさあらう(ドコカニ有ラウ)

何だがし分らね^エ。金だ^エがし銀だ^エがしどつきり有る。雨ふつがし今日は行^イごめ^エ

ガシと續くと三種の意味になる。一つはガと同じもの、一つはトカ、一つはカ知ランカラ・ト

悪イカラの意味になるのは餘程別風だ。何と思つてがし居るんだが などはガシを取つても同じ

事になる。又ヨリについてヨカといふのはヨリカ・ヨリモの意味。

彼の人おれよかつえけ^エ(アノ人オレヨリカ強カッタ)

(25) のう にい又はにゆうなどともいふ。標準語ネイ・ナアである。第四種にあるのと同じ物だが、ヤ・カなどと同じに分けて見たのである。

おれのう さんののう 山さえつたればのう 道迷つてのう(オレネ キノウネ 山へ行ツタ
ラネ 道マヨツテネ)

(26) や (以下は第四種で語の終につくのだ)。疑問に用ゐるのは横柄な輕蔑した様な場合又
極存在^{そんざい}な語に。

何や(ナニカ)

誰書いたなや(ダレ書イタノカ)

感嘆なのは

今日は日曜だや(日曜ダッタナ) 自省の語

是は立派だや(立派ダナ)

忘れんなや(忘レルナネ)

なんでがんすや(何デゴザンスネ)

おらもうけ^エらや(オイラモウ歸ラウワイ)

遊ばうでや(アンビマセウヨ)

前提法に附くのは色々の意味になる。

ひよつとして間違つたらや(……タラ何様ショウ)

誰かもをばや(誰構フモノカ)

せつだ(セエッゲダ)事したて出来ろばや(ソレ式ノ事ヲシタリトテ出来バコソアラメ 出

来ヌモノナリ、止ミネー)

やだでばや(厭ダツテヘバサ)

(27) か 標準語カイの様に、婉曲にはガイといふ。

えごんであめが(行カウチャアリマセンカ)

雨降んでろがい(雨降ルドラウカ)

そでがんですがい(サウデゴザンスカ)

酒田ではガエといふ、さうして語句の中にも無意味に使ふ癖がある。

左さえつてがえ 突き當つたら右さえかさませ(左へ行ツテネ 突き當ツタタラ右へ行カサン
セ)

がの下にはノ・サ・シ・デなど附く。

もうござたがの(モウ入ラシツタカナ)

あの人どうしたがさ(アノ人ドウシタカ〔ナア〕シラン)

何時ござたがし(イツ御出デシタカネ) 百姓女語

おめへ先生さえつたがで(オ前先生へ行ツタカネ)

(28) よ ようと長音にも云ふ。命令法又は下に命令法を略した語、又は教訓的の語につく。

東京の様に注意をひき、親愛する所にはズを使ふ。

早くえつて来えよ 忘れんなよ

よく勉強してよ(よう)

そげたごときねもんだよう(ソナ事シナイモンダヨ)

大人しぐしんだよ(大人シクスルンダヨより更に謙遜)

(29) は ワと轉呼する。ワイとは云はない。感嘆

まづえいわ(マア好イワイ)

來ルワ／＼など文語と同じ使方だが、しかし多くは來ッゴト／＼といふ。演言葉には何ダ
ワ 何シタ所ダワなど多く、鄙しい語となつて居る。東京の女學生語のワなどに較べると變だ。

(30) し 東京語サの様で親愛の意味がある。そして慥かに受けばつて言ふ所に附ける。

(甲)一番えいなどれでユロ (乙)あれでユロ (丙)これしい、おれだばこれだ(コレ〔サ私ナラ
此ダ〕)

今日は來るし(今日は來ルサ、來ルヨ、來ルトモ)

どうして來うばし(來ルモンカネ)

割木もて來たぞし(薪モツテ來マシタヨ)百姓女語

さうでねえでし(サウチャナイテサ)

もう出來だつてえし(モウ出來タトモサ)

併し疑問に附く時は受けばる譯には行かぬ。

御前の悪いでうな何處し(オ前ノ悪いト言フノハ何處デスナ)

昔あの人に呉れたなども今はどうなつたんだがし(遣ッタンダケレドモ今ハドウナツタンダ

カ)

(31) さ はシをアと揚げた様な心持で、悪くすると生意氣になる。大抵は前のシと同じ場合
に使ふが、ゾサ・デサとは言はない。

さうがさ(サウカネ)

そでねえがさ(サウデナイカナ)

そだつてえさ(サウダトモヨ)

とても來うばさ(トテモ來バコソヨ、來ルモンカ)

(32) ぞ は大體は鄙しい言葉、又は暴い、又は態と威嚴を作る場合に指示警告の用をなすの
で、ぜとなると少し投げ遣りの趣が加はる。やさしくいふ時はずとなつて東京のヨに通ふ。

ジエは酒田方面の語でズと同じだ。ぞしとなると前の様に郷中の語になる。

わねえづぐんぞ(貴様ナグルゾ、成敗スルゾ)

わねえ向へめえぜ(貴様抵抗サレマイゼ)

明日行こうぜ(アス行カウゼ)東京ノヨリハ酷ク粗末ダ。

叔母ちや御座はんでうぜ(叔母サン入ラツシャルグラウゼ)是ハ目上ノ者ガ應揚ニイフノデ
威張ツテモ居ナイ。サトモ云フ。

おめエ行げばえでんだす(オ前イケバ好イテンダヨ オ前行クガ好インダヨ)

おがはん行つて來ましたす(オ母サン行ツテ來マシタヨ)

そだじえ(サウデスヨ)

(33) と 第一種トの下に 云フ 云フ事ダを略したので東京の様にてもなる。

昔あつたけど、ちんちとばんばとあつたけど(昔アツタトサ、チバイトババアトアツタトサ)

さうして(わりイど(ワルイと)
わりツて(悪イツて))

鼠ヶ關は莊内で一番景色えい所だ(だど
だつて)

何(なん)
でがんす

(ど(どう)) 粗末デ詰問ニモナル
ヤサシイ

すべて東京語と大抵同じだ。

(34) てエ 前の莊内の合口音的のテとは違つて東京流の開口音的で、勿論・トモなどの意味、

トイヘバの約テヘバの下略かも知れぬ。

大丈夫だつて(大丈夫ダトモ)

そでがんせうつて(サウデゴザンセウトモ)

何てエ様のテエはトカと同じで、トヤラの約である。此處のテエとは関係ない。

(35) で 東京のテだが噂を表す(33)のテではない。鼻音を含まないことは一般の例の様。

お互少し金ためるで(金溜メヨウテ)

あの子は中々利口たで(利口ダテ)

どうも其處がうまいで(旨イテ)

是は文語トヨの約轉でもあらうか、ヨにも近く、ト云ヒテの意味らしい所もある。ヤをそへて
デヤといふと誘引驚歎の意味が加はることもある。

中よく遊ばでや(ソウバウヨ)

あれく驚きがなさうでや(肴ヲサラフテ)

あれきれでで人、皆食つたでや(嫌ダト云フ人皆食ツタテ)

そげエ急がしねで、もつとあすんで行かへでや(ソンナニ御急ギナサランデ、モツト遊ンデ
入ラツシャイナ)

何ダイをつめて何でエといふでエは指定助動詞で此でとは別だ。

(36) ちや テヤの約だらうと思はれるが、用法は全く無意味な所もあり、スシと通ふ所もある。そして此の第四種の以上にてはとは結合しないが、莊内ちやに最上べ といふ諺の通、實に多いのである。松嶺邊はチャの代にデを多く言ふ。

(甲)あの花明日は咲くちや (乙)そだのう、咲かうのう。

えちや／＼こげエだえいべちや有んめちや(好イコト好イコトコンナ好イベ、有リマスマイヨ)

來いヘちや 行けヘちや(行ケ御座ヘエ)

(37) のう 第三種に擧げたノウと全く同じで、ニイ ニュなども云ひ東京のネナに當る。

問ひ懸けて賛成を得ようとする様な時にはチャノウとも續く。

酒田邊は港の爲かネイといふこと少しある。それから郷中などはネヤともいふのはノヤの轉で、東京のネとは根本が違ふ様は思はれる。又ンナといふこともある。ノシと續けるのも郷中ばかり。

何でエ其處らさ有つけのう(何ダヤラ其處ラヘ有ツタネ)

おぼげだこんでがんすのう(驚イタ事デゴザンスネ)

あしたは晴れつちやのう(明日ハ晴レルヲネ)

え、天氣ダネや(丁寧ニハのしト云フ)

をちや、えござエんな(弟、行カウヨナ)

第八 第六のてにハの補遺

第一種(2)な 文語で主格を表す助辭にガとノとある中に、口語では多くガを用ゐ、ノは下に體言の來る時にのみ用ゐるが、九州邊では御客様ノアルといふ様にもいふ。そのノ莊内ではナとなつて

損な行く、品な悪い、疲だな起きて、錢ぜにな無くで、心しんな腐くつた、自分な言つて、

といふ風に言ふ。之を東京語に譯せば、皆ガに當るが、ガの變じた音ではあるまいと思はれる。

主格名詞にガを附けるのは、莊内語としては餘程上品ぶつた語で、此のナは町人百姓共に用ひる

唯一の主格助辭と言つてもよからう。尤もこのナは撥音の下でなければ附かないことは此の例の通りである。

第九 音韻の三

一 は行の音 東京ではフの外はすべて唇を合せない喉音^hにいふが、莊内ではハ・ホの外は合唇音である。是はfよりは少し軽く齒には關係しない。東北・出雲・沖繩なども同様この合唇音が残つて居るが、是は日本の古音に相違ない。そして古老や在方^{ざいかた}の人は今も木のフア 御フオン(本) など發音するが、音の變化は早い者で、すん／＼ファ・フォは減つて行く。出雲邊にはフィ・フの反對に用ゐられることが多いが、莊内でも教育のない人は矢張りこれをやる。二ツをヒタツ、人をフトなどといふ。是は川北地方に多かつたのか、自分の聽いた所では川南より川北の方が耳に附いて居る。維新前に酒田の語を嘲つたのに

びきし(葺師) 屋根びく(葺く) ふねをぶく(引く) びねと言はぬは不思議なりけり

といふ歌があつた相だ。此のイウ列の變に似たのは

二 ゆとよ で土族以外はすべてヨといふ。そして稀に改つて言ふと、態との様に取り違へる。

ヨキ雪 ユル(夜) ユブ(呼) ヨビ(指) ヨロリ(圍爐裡をユルリといふを詛る) カヨ(粥)
タヨハン(大夫様) ヨミ(弓) ユメ(嫁) ヨメ(夢) ユウジ(用事)

是は拗音になつても同様で

ジョンサ(巡查) キユウイン(教員) キユウ(今日) ジョウ三日(十三日) ニンジヨ(二十)
オシユハン(和尚様) チョウガグ(中學) ミユウ(妙) リョウギ(流義) ショウゲンマチ(周
賢町)^{コレモ一般ニ} ニユイリン(如意輪)^{コレハ土族モ} イノ(犬) ノフ(縫)
ノスビト 盗人) ヌバス(延) など ヌ・ノの誤や ル・ロの訛も少しはある。

三 しす、ちつ の分らないのは東北一般の通弊だが、維新前に教員館に入つた人や、士族の家庭では大抵間違はなかつたのに、明治になつてすべて崩れて了つたといふ事である。是は學校教育で少し骨を折れば正しくする事が出来ると思ふ。ヒ・フ、ユ・ヨなども今は大きによく

なつて來たのを見ても分る。しかしシスの混同はそうなる譯も有ると見えて、古く越前のアスバを足羽、備前のイハナスを磐梨と書き、千葉縣のイスミを昔イシミと言つて伊甚・夷湛など、書いたのである。

四 長音を短音に 言ふことが餘程多い。想像ウ・ロウも大抵は短くいふ。

エゴ(行カウ) ガッコ(學校) ゴンゴ(五合) イッショ(一升) オシヨ 和尚) サウソ(ソウ爲ヨウ) カタッポ(片ッ方) テュン(大層) オテントハン(御天道様) ゴンボ(午勞)

五 二音縮約 中でアイ アエイエをエと約して而も多く短音に言ふ所が訛の甚しいのであらう。

アンメ(有るまい) ケエロ(歸らう) ネ(無い) ヨリエ(寄合) ケエトシイ(甲斐／＼しい) エラシイ(愛らしい) メエル(參る) セヅ(才藏) タウエネ(たわいない) テエラ(平へ)(蠅) デエイグ(大工) イチベ(一倍) ヘエル(這入る) エノメ(家の前) ヲシエル(教へる) シエル(さえる＝される) メル(唐見える) 天竺見える) テエヘラクツク(太平樂つく) オモシエ(面白い) タバイメ(只今に) ヤニメ 矢庭に)

六 いを え といふのは、特殊の語を除いて、川北酒田邊に限る。是は他縣にもあることだが、直したいものである。

七 きよ を ちよ といふことが在方などに少しある。

ちよう(今日)

八 直音を拗音に いふのも少し。

シヤレ 去れ＝退け) ジョウサナイ(造作ない) ジョウリ(草履) キンニ(キンノ＝きのう)

(昨日) コンニヤ(今夜)

併しテハ デハ レバを チャ チャ リヤとは言はない。

附

莊内語の語釋 應募披露

三矢氏監督の下に、木鐸社にて募集せるものなり。釋後、評曰とあるは三矢氏の批評なり。(註一)

キンカ(名) 雪滑り道の凍りて、鏡の面のやうにてらくするをいふ。近松淨瑠璃などに、藥罐

頭をキンカ天窓に無用の提灯とある、同義であらう。

評曰、キカ／＼と光る形容より出でたる語なるべし。ギンガリといふ語もあり、キンカ頭ともいふ。

カッチ(名) 水源地方をいふ。即ち山間谷川の兩岸俄に幾部落をなして居る地方、これは河内のカッチ
轉であらう。萬葉集に、たきつ河内などある、これである。

評曰、松嶺邊にてはカハチといふ。カッチは何地方にや、地方別にするも有益なるべし。

カツビ(名) 小兒の飯事マゴトをいふ。勝手カッチ(臺所)アツビ遊の轉であらう。カツブ又はケツブともいふ。

評曰、鶴岡の方にては言はぬ様なり。

タガク(動) 持つことを普通にいふ。手昇^{タガ}くの意義の轉じたのであらう。(註二)

ムスナグ(動) 結ぶと、繋ぐとの二語をムスナイデかやうに面白き語が出来た。

ヤシメル(動) 卑しめるの轉。

ヒヤシ(形) 久しの轉。

評曰、ヒシヤシを中においてなるべし。

エキタイ(形) 暑苦しい意。エキは息^{イキ}にてタイはコチタシ・メデタシなどのタシと同意であらう。

評曰、上里にてはスグイといふ。一般に通じ易し。(註三)

カバボチイ(形) まぶしいの意。カバは輝の意。ボチイは、まぶしのぶしと同意か、意義考へ得ず。カバボシイともいふなり。

評曰、ボチイはボシイといふもブシはハユシなるべし。

ソシマ(副) 其の儘の轉。直^{ナキ}に、やがてなど、同義に使ふ。

評曰、其の間 なるべし。

ゲン(副) 實^グにの轉。ゲン丈夫だ、ゲン善^チなど、使ふ。

評曰、氣丈夫ナルモノダをゲンモンダといふ。ゲン強イモンダの中略か。

マケル(接尾) 設ける。或は構へるの意。ウソマケル オツマケルなど、使ふ。枕草子に、才^{サイ}まくるとある、同義であらう。

評曰、川北に限る語なるべし。(註四)

ダクナイ(接尾) 紙ダクナイ 墨ダクナイなど使ふ。保元物語に 矢たうなに といふ語がある。

此語の解釋に當代の諸先輩は苦しんで居る様子ぢや、莊内に來ればソシマ解^グせるのに。(註五)

評曰、然り一步を進めてタウンナとダリネとの本義關係をも知りたきものなり。

三矢氏の解に意見のあるもの(註六)

セツヘ 精一杯でなくて、背一杯であらうと思ふ。

ヨビテ 一日をヒシテといふ。シテ更にヒテに轉じて夜にくつ付けたのだらう。これは夜すがらといふを轉用して、日すがらといふも同じ類推の例である。

評曰、日一日のヒトヒがヒテと約るなるべし。

リデネゲッダチャ　ゲエは、氣・様子とあつたが、かやうに解するよりも、ゲエは足利時代の狂言によく使はれて居るゲナの轉とする方がよからうと思ふ、そうするとサウデナイゲナチャとなる。

評曰、上方西南には今もゲナといふ。それに同じきは固よりなれど、そのゲを説明せしなり。

成澤直太郎解

キンニ。　昨日。キノフがキンノフとなり更にンとノーと約りてニョとなつた。

タリゴ　垂氷。タリゴホリの約であらう。

クリ　暗礁。水の激しき渦を巻き、その狀物をくるがやうな所から名づけたらしい。

評曰、クリは古語のイクリであらう。イクリは海石などいふ解もあるが、暗礁と見るのが一番よい。そしてイクリのイは發語クリは石をいふのだといふ解が釋日本紀にある。山陰道では石をクリといふ説もある。此のクリは誠に珍らしい。始めて聞いた事だが、古言の解經

に一つの傍證を與へるだらうと思ふ。

セ、ナギ　下水。細流即ちセ、ラギの轉か。

コンマ　牡馬。古言、乗馬を駒といひ、乗馬は主に牡馬なるから、コンマと言ひ慣はしたのであらう。

評曰、コマともいふ。

ソウヤク　牝馬。牝馬はいろ／＼のことに使はるゝより雜役といふ名を負せられた。

ニラムサ　樵簗。莊内地方ではこの簗、主に檜に生ずる。尤も樵はない。これ檜に生じた狀態が總のやうなる所よりナラブサ更に轉じてニラムサとなつたのであらう。

ギンバサ　神馬藻。ジンバサウの轉。古言ナノリソ、正月蓬萊に供ふるホンダハラといふも同物だ。

評曰、ギンバサウともいふらしい。東北には一體にガ行とザ行の混同がある、丁度英語のGが兩方になる様に。

オヤグ或はオヤゴ　親族。親來の意か、解せず。まさか親子の轉でもあるまい。

評曰、親子だらう。

メラス 下女。メラス女郎衆の轉。

評曰、メラシといふ様だ、語原もどうか。

ホロケ 無神經。オボロケ臆氣の轉か。ホロケルと動詞にしても使ふ。

評曰、ホクといふ下二段活の語が古くからある。ボケルとも轉化していふ。それにロが入つたのだらう。

ナヅキ 額。ウナネツキヌキなど祝詞式にもある通、更に轉じてウナヅクとなり、ウナヅケば額が座席に摺れあたるより、自ら額をナヅキといひ慣はしたであらう。

評曰、ナヅキは腦の古言だ、それを額に誤つて言ふのだらう。

ブノコボ 頸窩。ボンノクボの轉。

評曰、訛らないでもないふ。

エモツラ 痘痕面。あばたの事。山芋などの肌の凸凹又は班痕あるよりそれもて形容した名であらうか。又方言バエコともいふ。未だ解し得ない。

評曰、エモツラは川北だけ、一般にはイモツラといふ。イボツラの變音だらう。

シヤックリ クサリ 咳噓。咽喉より何かしゃくり上げる心地するよりの名であらう。

評曰、方言ではない。

クシヤビ 噓。クサメの轉。

評曰、是も一般に分る。

タンボ 袂。タモトの轉。

オマル 便器。古言屎をクソマルと訓じて居る。即ち屎をマル器なるよりマルといひ、御マルともいふ。又方言オカハともいふ。これはカハ厠より來たのであらう。

評曰、信州邊では今もクソヲマルといふ。さてオマルは方言ではない、徂徠の南留別志にも已に説いてある。

ウスバコ 小刀。及が薄く出來て居るよりの名。コは添へた語である。

評曰、鶴岡方言では聞かない。秋田系を引いた語か。

(註一) 木鐸社は山形縣酒田港にあり。

(註二) タガグか、グは中瀬音のやうなり。

(註三) 上里カミザトとは鶴岡市の南方の農村をいふ。

(註四) 川北とは酒田港地方即ち山形縣飽海郡なり。

(註五) ソンマとは直ぐにといふ意味なり。

(註六) 以下三項も成澤氏の解を三矢氏が評せるものなるべし。

莊內方音攷

氏家剛太夫天爵著

莊内方音攷

氏家剛太夫天爵著

方音とは一方の音韻の事を云ふなり。天下の正音に對して是を方音と云へるなり。此考は即ち我莊内の音聲の説なり。此方の音、もとより士太夫の上には有ること無し、只庶人の訛音の事と知るべし。

○方音、ユヨの音に別なく、皆ヨと唱ふ。露をツヨ、雪をヨキ、春風をシヨンフウ、冬風をフヨカゼと言ふの類なり。

訛はいくちも有れど、皆五音を出でざるは倭語の妙なり。されば古言にも五音相通言多けれど、言ひ馴れたるは耳にも立たず、古き物語等には多くあるなり。

是より及ぼして、チウ ジウ キウ等いふ音をテウ ゼウ ケウなど呼ぶなり。例へば忠臣寵臣に別なく、一重一丈を混じ、灸治經師の分ち無きが如し。

往々物知りなる民は、チヨウ キヨウなど言ふべきを、却つてチウ キウなど呼ぶ者ありて、茗荷をミウガと言ひ、挑灯をチウチンと言ふの類なり。固より論するに足らず。

無學文盲なる民のみ然るやと思へば、歌の片端をも學び、神書儒書をも少しは窺ひたると云へる者も、右のユヨの混同はまぬがれず、剩へ只口に唱ふるのみならず、文字に書くにすら別無きものあり。これ例へばイ 井、ヲ オ、エ エ、古昔は自ら呼び別けたりしを、後世混同して、京師の人と雖も呼び別くること無きが如く、今に至りては家々に教へ、戸々に説くとも、庶人のユヨの音を分ち唱ふる事は成り難き事なるべし。

○或人の説にユヨの音混同するは奥羽の人皆然りと云へり。余他國の事は知らざれ共、莊内にて士以上の人は何ほど不學文盲なる者もユヨを混じて呼ぶ者一人も無し。然れば奥羽の人といふは少ト漫然たるやうに思はゆるなり。

○方音のバは合音のみにして開音に呼ぶ事甚だ少し。母をハハと^合言ひ、

母の假名ハハなれ共、聲に呼ぶ時はハワと^開言ふべし。江戸の人はハハと二字共に開音に呼ぶ。

是も訛なれ共、正音のハワ、田舎人の口にはあまりに耳立つやうなれば、兒孫等にはハハと江

戸音に言はしむるなり。され共謠にてもうたふ時は必ずハワと唱ふべしと教ふることなり。

木葉を木のハ、^合及物をハ物と言ふ類なり。是等のハは一切に開音なり。然るに方音皆合音に呼ぶ故、士君子も皆合音に呼ぶ人あり。謹むべし。又ビベセ等も方音は合音ばかりにて開音無し。され共是等は呼へ分かす共、さてありなと思へば、京師の人に糺したる事は無きなり。謠等うたふ人は必ず正音に呼ぶべき事なり。

江戸莊内ともに人に應ずる詞ハ^イ。^{莊内は合と江戸は開}言ふに、在郷者は少し黠なる奴は開音にハと對ふあり。是も方音なり。

○莊内の土人は音便連聲と云ふ事を知らずして訛る言語多し。是誰も知りたる事なれ共、兒孫の爲に其例を云はゞ上の音ンとはねたる下の音アイウエヲはナニヌチノに轉じ、ハヒフヘホは半濁に轉するなり。例すれば

銀杏 ^{アン} ギンナンニ^アの反ナ、 雲林院 ウンリンニン、 陰雲 インヌン、 寛永 クハンチイ
ニエの反チ、 觀音 ^{オン} クハンノン

右ア行ナ行に轉するなり。

新板 シンバン、 陳皮 チンビ、 君父 クンブ、 權柄 ケンベイ、 根本 コンボン
右ハ行半濁に轉するなり。

今夜 コンニヤ、 面諛 メンニユ、 陰陽 インニヨウ

右ヤ行拗音に轉するなり。

井エはア行に同じ。

天和 テンナ

右ワ行ナ行に轉するなり。

井ウエオはア行に同じ。

○又 上の音ツと詰まりたる下の音アイウエヲはタチツテトに轉す。ハヒフヘホは半濁に轉じ、
ヤ井ユエヨは拗音に轉じ、ワ井ウエオはタチツテトに轉するなり。例すれば、

一握 イツタク、 八音 ハツチン、 密雲 ミツツン、 忽焉 コツテン、 一翁 イツタ
ウ

右ア行タ行に轉するなり。

合羽 カツバ、 橘皮 キツビ、 實父 ジツブ、 屈平 クツペイ、 鐵炮 テツボウ

右ハ行半濁に轉するなり。

月夜 ケツチャ、 逸遊 イツチュウ、 葛葉 カツチヨウ

右ヤ行拗音に轉するなり。イエはア行に同じ。

越王 エツタウ

右ワ行タ行に轉するなり。井エウオ ア行に同じ。

以上唯一例を擧げて示す。千言萬語皆かくの如し。此事京師の人などは、平日の言語皆此通りな
れば、誰書き記して説き示す人も無く、其外の人かも知れたる事故、是まで論じ置かぬと見えたり。

太宰徳夫(註二)和讀聲の事を載せられ共、五十音を以て正したるに非ず、只一端を言ひ置きた
るなり。

○右の連聲、江戸の人などは守らぬもの多く、殊更に唱へにして呼ぶ人あり。例へば文右衛門と
云へる人を、江戸の人はブンエモンと字の通りに唱へ、莊内にてはブンニモンと唱ふ。何も訛に
て、ブンチモンと唱ふが音便にて口にたまらず、故實にも叶ひ言ひよし。江戸人の如くにては聲

上はめい連聲なく
下は
連聲ありと
いふが
かたがた
は
あ
や

滞りて唱へ憎きを、彼も知るべきをいかで斯くは唱ふるにや。莊内のブンニモンは口にはたまらざれ共、エの音のニに轉すべきやう無し。是は末に論ずる如く、方音はエとイと混する事多ければブンイモンと訛りて夫れよりブンニモンに轉じたるなるべし。此類の事枚擧するに暇あらず。

○方言にイエとヌノを混するのみならず却つて彼是に訛る。例へば案をツクイと言ひ、圍をカコエと言ふ。塗師をノリシと言ひ、行れぬ 立れぬなど言ふべきを、行れの 立れなど言ふなり。いかなる事にて斯く彼と是とを互に訛れるや最も不審多き事なり。余 片歌 方言に電段な物なり といふ判を頼まれて其詠艸を見るに、イエ、ヌノをあらこちらに書る事まゝあり。歎かはしき事なり。又オウ、サ シャなど混する事も多けれ共、訛の儘に書き記す程には至らざるなり。

有化

○方音 カキクケコ タチツテトの十音には必ず清音と濁音との間の一種の音あり。假に中濁と名く。此方音は士大夫と雖も免れず。例へば、鷹を タカ、柿を カキ、行くを ユク、酒を サケ、章魚を タコ、勝を カツ、待を マチ、的を マト と云へるが如き、△點の文字皆中濁なり。是上方に無き音なる故、鷹と云へば カキ 鶴と思ひ、柿は カキ 鎗に混じ、行くは湯具にまざれ、酒は下とまがひ、章魚は田子、又は未、市は意地、勝は數、待ては迄、的は窓に聞

きなさるゝなり。源の義經と云へば、皆戻りの ヨシツ 芦簀にやと云ひ、下坂の脇差と云へば、下嵯峨の輪切刺と間違へ、是上方の外も何方にも此中濁の音絶えて無き故、少しにても濁れば本濁に聞きなす故なり。

余一ト年、最上郡(註二)を通りし時、土人行くと云ふ事をユグと言ふ。莊内にては中濁に言ふを爰にては本濁に呼びしなり。莊内にて是を笑へ共、實は五十歩百歩なり。

賤民はさてしも有るべし。士君子、苟も書を讀み詩を誦し朝に立ちて賓客と物言ひ、四方に使して君命を達するものは勉めて中濁の音を用ひず、本音の正しきを呼ぶべし。此種古常の言語に有るなれば、心を用ひて中濁を去るべき事なり。

○右の中濁音にて、歌などよみたらんには殊に聞きぐるしかるべし。例へば

奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の聲聞くときはあきそかなしき

と云へるが如き、三十一文字の内七文字、中濁に讀む人あり。鹿の音も中濁に行くべき音なれ共、是は多くは本音によむなり。又

夕されば門田の稻葉おとつれて

などて文字もし濁音なれば、其義は相反するなり。此中濁は、莊内にては謠などうたふ人は殊の外に吟味するなり。吾藩の重田鳥嶽（註三）は莊内生れにて猿樂を好みたる人なり。謠うたふ人には必ず五十音を數返云はせて此中濁の穿鑿甚だ強かりしなり。余が岳父堀少公（註四）は平家をよく語りたる人なりしが、常の言語も中濁は努めて言ふまじき事なりと、著述の書中にも論じ置きたり。謹しむべき事なり。

○前に論ぜし連聲の類に連濁と云ふ事あり。本は濁らざる音なれ共、上の字音につれて濁る事あるを云ふなり。南山 東方の如きも サン ホウ 二字共清音なれ共、南東の二字につれてナンザン トウボウと讀むなり。此類枚舉するに暇あらず。尤も是は清音に唱へても口にたまり云ひ憎きにも非ず、只古實にて斯の如きなり。又 乾兌離震巽坎艮坤と八卦を順に讀む時、艮はもと清みたる字なれ共、坤にまざるゝ故、濁りて讀むなり。斯様の事數々多きを、莊内の人などは心を用ふる事なく、己が心まゝに書をも讀み詩をも誦するなり。總べて此連聲連濁等の習は皇和の古實にして、平日の言語のみならず、菅江二家にて書を讀むに必ず是を用ひ給ふとなれば、學者忽に思ふべき事にあらず。然るに藩の一儒者此音便と云ふ事を嫌ひて、一概に字音の通りに

讀みて閏月を以て四時を定め、載をなす。又は八音を遇密と讀みて四時イシシと讀み、八音ハ童子にも句讀を授くるを聞きたり。彼人の子を賊すると云ふに近からん歟、歎すべき事なり。又一士人平常の言語何にても字音の通りに唱ふべき事と、ふと思ひて、其後は夫婦をフフ、女房をニヨバウ、團炭をタンドン、溫飩をウンドン など言ひたりしが、人の聞き受けざるに困りけるにや、伸ぶるも縮むるも、もと和語の例なる事を悟りけるにや、一年ばかりの後常の言語に成りけるとぞ。

○方音にユの音無きが如く、江戸音にクワの音無し。クワと唱ふる分は皆カと唱ふるなり。又サの音をシャと唱ふる事多し。これ江戸の人も謠などよくうたふ人には決して無し。藩の五十嵐又平は江戸生れにて謠を善くする人なり。廻國の僧にて候、觀音薩埵などうたへ共、カイコクカンノンとは言はず。されば是も方音ユの如くにて、江戸にても心ある人は、本音に唱ふと見えたり。されど怪むべきは渡邊伯秀（註五）の話に江戸の子供は句讀を授くるに、關々雕鳩を幾度教へてもクワン／＼タルとは言ひ得ず、カン／＼タルシヨキウとばかり言ふには困りたりと語れり。されば方言のユも今庶人に教へ難きとは知れるなり。

(註一) 春盛なり。

(註二) 莊内人の云ふ最上郡とは、今の山形縣新莊町を中心とする最上郡も又村山郡をも云ふやうなり。この最上郡は何れの地を指せるならんか。

(註三) 諱は範茂、通稱道樹、字は子積、鳥嶽はその號なり。莊内藩醫にして藩校致道館の助教兼司業。

(註四) 濱萩の著者、堀平大夫季雄の字なり。

(註五) 致道館句讀師兼助教渡邊恒右エ門字は子基の事か。

濱

萩

堀

季

雄

濱萩の序

明和丁亥の春、水野華竹大夫の妻なりし人、江戸へ旅立すとの馬の餞に、はまをぎといふさうし書て贈れること有き。年へて後かくと傳え聞たる人々に、其副本よほんやある得させよと乞れて、箱の底さがし求ればやうやくに尋出たれど、爰かしこ塗汚し點かけなど尾籠びろうなる稿しながきなれば、我からおぼめかしき事の多きを、今更にかうがへ合せ繕寫して與へ侍る。これを濱萩と名付たることは、彼の冊子の端はしに、都の辭ことばなりとて下さまに移りては必しもよしとのみに非、鄙つなとても古く所以あるかなづかひの残りたるもあれど、郷さとに入ては郷の習に従ふといへば、出羽國いでやくにのはまをぎはさもあらば有れ、武藏の國にいなば、あしと云てこそあらまほしけれと書る敍文の辭を取れり。婦人の用意にものせしさうしなれば、全篇婦人の詞づかひを要とす。爰に洩たる數々をば別に續はまをぎとして、其撰いまだ稿を脱せず。

堀 季 雄

はまなき

江戸にて

庄内にて

かいどりと云を

はをりき

あるきチ

帯つき或は帯つけ

ちばんを

はだこ

本字は襦袢じゆばん又は襦半じゆはんなど書く。されどもジユバンとは云はず。胴着だちぎと云物は製別に在。

こしをびチ

たんな

たんなといへば馬の手綱の事になる、くけざる腰帶を江戸にてはしごきと云て通ず。これを酒田の詞にひらきたんなといふ、殊におかし。

ばうしチ

かふりもの

瀬川ばうし、尾上ばうし、上ケばうしなど、皆庄内にていふかふりもの也。雪帽子ばかり庄内にてもばうしといふ。酒田詞にすそといふはいかなる故にや。

たすきを

たしこ

はうかふりチ

すつほつみ

きものチ

きるもの

宇治拾遺に、きる物くひ物にも飽満てといへるは、着するものにも食するものにも不足なしといふ事にて廣く云たる辭也ことば。つれ／＼草に、第一に食物、第二にきるもの、第三に居る所といへるも、着するものと云義也。たゞ衣服の事にルのかなは入らず。

長ばかまヲ

長上下

はかまぎチ

上下ぎ

帯しめるチ

帯する

帯するといへば帯にすることに通ふ。腰へ廻すをばしめるといふ也。

一粒ひとつぶ鹿子かごチ

まめしぼり

さし入りチ

ゆふぜん

むかしはゆふぜん染といへると見えて、上杉謙信上州かみづま寄西きさいの城攻の時、人質ひこぢ郭くわくに籠りたる婦

人の、ゆふぜん染の帷子水に移りたるといふ事冊子にあれど、今はさし入と云て通用す。呉服紙の上書にゆふぜんもやうとすることのあるは古き詞を用來れる也。

一 小袖の事を江戸にておかいこといふ。蓋の字よりして絹布の惣名とするなるべし。木綿きものをおひへといふ。異國の文字には吉貝衣キツバイと書く。

○平賀國倫が物類品鑑の木綿の條に、東壁曰、木綿有三種、似木者名吉貝、似草者名古終、といへり。古と吉と字體似タル故いづれか誤れるにや。吉貝衣の事は後世異國の雜書に多く見えたり。又おひへを文字にかく時御婢衣とかくは後に作り出たるなるべし。あたゝまりのうすき衣服故名付たる稱と見ゆ。

一 寝巻を江戸にてかいまきといふ。

一 洗濯物を江戸にてすましものといふ。

たぶ

たふトヌム

たぶさしをたふかうがいと云、江戸にて通ぜぬ名也。近年髪げんの結方のはやりよりして髪げんさしといふ物出來たれど、是をば庄内にても髪かうがいとは云はず。

髪かきを

やうがい

此詞何の轉訛にや考る所なし。元服の式に打みだしといふ物有。柳宮にのせてかんにい泔盃センミツイと共にさし置く道具也。其打みだしには、櫛と元結と笄とを置く。此カウガイのカ文字をやと誤てやうがいと心得たるにや。

どうす

おはぐろいれ

しらが

しらび

これは白キ毛と心得て誤れる也。白髪しらげの略語也。

まみ

かうのけ

本字は眉まゆなれどもまみと云てもよし。女の詞にまへびきともいふ。眉毛有て鐵髻かねづつ付たるを江戸にて半元服といふ。

ひたゐ

なづき

うなづくと云詞より訛あやまれるにや。うなづくとは項うでを突くといふ事也。合點がてんとうけがふ時は項を點動するゆへ此訓あり。異國の詞には點額てんがくと云て直に額といふ字を出す。又額がくスといふ。

額はおとがる也。點額と同じ義也。

○未得が時雨の狂歌に、空くもりはやをもなくなるかみな月なつきより知る初時雨かな。

頭痛するチ

なつきがいたひ
なつきがやめる

頭痛といふは堅き詞故、女は血の道、又は南氣など云て頭痛に通ずる也。總じて庄内の女は四角なる詞をつかふ。お慮外お寛大の類也。江戸にてはおはゞかり、おかたじけなどとしはらしくいふ。

かはチ

つら

狭衣に、宮少しをきあがりて見をこせ玉へるつらつきまみの美しさと有て、面字をつらといふは悪しきにあらねど、手づよき詞故江戸にてはのゝしる時ばかりいふ。泣つら焼つら馬鹿つらの類、にくくしく云んとする時かはといへばぬるく聞ゆる故也。

目チ

まなく

眼のコクと訛りたる也。江戸にてはまなことも云はす。

めつかちチ

めつこ

メツカチとは目片といふ事也。飯の片煮なるを庄内にてめつこ飯といふ。米の目のにへつぶれたるも有、つぶれぬも有と云事なるべけれど江戸にて通ぜず。

ちんばチ

びつこ

はなぐたチ

はなぐす

つんばチ

さんか

さんかとは頭の剝たる事也。庄内にては雪路の光るをさんかといふは道理にかなへり。歌の詞には氷面鏡といふ。

どもりチ

まんなき

物いひの廻らぬ事を江戸にて舌足らずと云。

手の甲チ

手のこつは

ゑりもとチ

ぼんのくば又ぼんのくど

ひざかしらチ

ひざかぶら

かゝとチ

あくと

しりず

いきみ

江戸にて女詞においと云。

一 長の低きを江戸にてちくだといふ。

一 ふとりたるを江戸にてどぶつといふ。肥たと云詞江戸にて多くつかはず。

一 ちいさきを江戸にてちつほけと云。上方詞にちさいといふ。俳諧などにもちさいとつかふ事

多し。小刀をちさ刀といふ人も有。ちつちやいと云詞はたま〜いへども、ちつこいは庄内に
かざる。

一 やせたる事を江戸にてやせぎすと云。庄内にてやせはつたぎと云は聞にくし。

一 悪る氣のなきを江戸にておむくと云。

一 結構人を江戸にて氣がよいといふ。庄内にて氣がよいといへば氣象のさへたる事とす。近年

江戸にて心に望まぬ事を氣がないと云は下賤の詞にてよき人は云はず。

一 庄内にて氣違の事を馬鹿といふは大なる誤なり。氣違は狂人也。馬鹿は氣ぶ足なる者の事に
て魯鈍の義也。これを江戸にてふぬけ、ぬけ作、のろまなどといふ。庄内詞のめろり、おんへ

ろ是なり。

のうてんきず

とんてき

江戸にて飛上りともいふ。

だてをするず

ちよなめく

酒田にてちやべなと云。いかなる故にや。

いきすぎるず

こまちやくれる

○林未央曰、近松が歌かるたの院本に横笛諸妍が上達部の評判せし事を云て、敦盛などはこ
まちやくれて十四の春から聲がはりと作れり。

さし出るず

さいはじける

○同日、五色墨の付合に、紫蘇漬の箸まで染まるさいはしけ。

こしやくず

こつへ

ロきんず

さべちよ

しやべるず

さべる

そしるヲ

わるくいふ

悪すると云辭ある故よきやうなれ共江戸にていはす。

よぶヲ

よばる

よばはるをつめたる辭なるべけれど、たと呼かけるにはけうとし。

はにかむヲ

わにる

耻かしがる事也。をくめんするといふ詞も江戸にていはす。場うてするにてよし。

○江戸の石田未得が月の狂歌に、うつくしとはめあげられて山のはに木隠れするや月のわに顔と云たれば、なき詞ならねどなべては云はす。

うそつくヲ

うそこく

此詞は柳櫻をこきまぜての歌より出て、取付引付いろ／＼にくろめるの義也といへど、ばくち打をばくちこきともいへば、こくとは庄内の罵辭と見えたり。いけみのちこくも同じこくなるべし。

なぶるヲ

わらふ

人に笑るゝなど云は謗らるゝ事也。なぶるは調弄の義にて謗るとは違ふ。人をてうすと云も調弄の調の字なるを、庄内にてはちよすつめる。いじると云は難義させこまらする事にて、調弄とは少し意味異なれども、庄内にては混じてなぶる事に用ふ。

せびるヲ

いびる

いじるに似たれども一段はげしき意有。いじめるとも云。

せつくヲ

はたる

促の字にてよき詞なれども江戸にて云はす。かけはたりはかけ乞也。

○除夜の狂歌に布留田造、いつかわれ借錢乞に身をなして師走のはてにはたりありかん。

すますヲ

なす

借錢などを返す事也。年賦を庄内にてなし崩といふ。

○佛師歳暮の題にてへつゝ東作、種々さつた佛も年をとり佛師かる地蔵顔なするんま顔と云たれば、此世話は泛くいひならせし事と見えたり。

子を生むヲ

子をなす

成の字にて、成就の義にても有べけれど通ぜぬ詞也。

うぶ聲を

うがごへ

しゝチ

しこ

ばゞチ

いんこ

ね小便チ

よつぱり

まるチ

をかは

よふなくチ

なきみそ

なきつら作るチ

べそつくる

いとさまチ

めごさま

庄内にてめごいと云はいとしめかはいるといふ事也。いとしめといへば無常の詞と心得れども、江戸にては愛する事を云。神代の巻に憐愛と書てメクシと訓じ、皇子の轉音也と釋したれば、めごしといふ詞はメクシより出たると見ゆれど江戸にていはず。

生れ子チ

あか

赤とよべば江戸にては犬や猫などのやうに思ふなり。

むすめの子チ

ねゝ

男の子チ

小ばう

此二ツ殊に笑るゝ詞也。むすめの子はぢやう、男の子はばう、下輩はこぎやうなどゝよぶ。人の子をばおぢやうさま、おばうさまなどにてよし。二番目の子をヲヂヲバと云事江戸にて通ぜず。庄内にて野郎やろうといふは二才なり。

一 江戸にてあにひといへばさへぬ事の通稱に成て、あれもよつほとあにひたのなどゝ云。庄内にておぢこといへばぶせう者の名目となる。皆所詞也。

一 江戸にてはとゝを、かゝあ、ちゝひ、ばゝあ、あにひ、あねひなどゝ跡を引てよぶ。庄内にてはトゝ、カゝ、ヂゝ、バゝなどゝつめてよぶ。

若旦那チ

小旦那

父親を

だゝ

親類を

をやこ

親子の字を遠き間柄までに蒙らしむるはいかなる所以にや。

一 庄内にて人の女房の事をばめつたにおかみさまといふ。江戸にもかみさまといふ詞あれどおの字は附ず。人に對しては御うちさま、お内儀さまなど云。中輩以下はおかたなど也。庄内にておへさまと云詞あり。おうへさまの略語なるべければ、貴尊に對して云べきを、おかみさまよりは次なる稱呼とす。江戸にて通ぜぬ詞也。女房をなつ、夫を^{おうさ}ごても聞えず。御亭主さまといふ事を略してごてさんなどとはいへども、手前のごてなどいふ詞なし。

一人をさしてわねといふ詞聞にくし。江戸にてあの人といふほどの事をぬしはどふしてかうしと云。さし付ていふことも有。紛るべからず。

一 庄内にて年のゆかぬ下女をあまといふ。江戸にてはのしる辭とす。それ故あまと呼^{よほ}るればことの外腹を立る也。小女をなぶりて年期あまめなどいふ。但し此詞は伊勢物語に、大淀のわたりにやどりて齋宮^{いづみ}のみやのわらはべにいひかけけると有て、

みるめかるかたやいつことさはさしてわれにをしへよあまの釣舟

とよめるよし見えたり。此童の女の手引にていつきの宮にまみへんとかこてる歌なれば、海士

の釣舟を童女に比したるよりして云出たる詞にも有んか。

中間

テ、

町郷中にてわかぜといふも通ぜず。

遊女を

おば

遊女の稱は國々にていろ／＼の云習し有て其國ぎりに通ぜり。(伊勢のアンニヤ、越後のウキ^{ゆめめ}ミ、鳥羽のハシリガネ、桑名のワタシ)酒田にてひしやくといふは流れを酌むの縁語とぞ。

おばの稱も、惣領むすめをば内に残し、二番目より賣出すよりして、例のおちおばのとなへを用るなるべし。

一 庄内にてはもり^{モウ}ば^{モウ}同じ者とす。乳をのまするはうば也。懷^だくばかりのはもり也。これを別^{わか}んとて乳うば懷うばなどいふ、むづかし。

一 縫物一へんの下女を江戸にてしんめうと云。おすゑしといふ名目庄内ぎりの詞也。御次^{おつぎ}御三^{おさん}間^まお末などいふ女中の役名もあれど、庄内のお末はすべてはしたの事也。

一 月のさはりを江戸にて手前^{てまへ}氣といふ。ゑんこばうといふは近年の詞にて、よき人は云はず。

一 庄内にて社人^{しやうじん}を大夫^{たいふ}といふ。伊勢の御師^{おし}などは春木大夫山本大夫など名につく故、大夫と云てもよからんなれども、江戸にて大夫といへば能大夫か淨瑠璃かたりの事とす。役者の大夫は極段に登りつめたるを云。遊女の大夫は京大阪の事にて江戸になし。高尾が稱あれども今は絶たり。一 出家を寺といふも大なる訛^{あやまり}也。寺とは出家の居り所の事なるを、お寺さまと云て僧の事にするは非也。酒田にて醫者を旦那様と云て通するもおかしき事也。

○坊主といへば何方にても僧の事に通すれど、元來僧を指て泛く坊主といふには非。院主庵主など、同じく坊の主の事也。承久の亂に、覺心といふ奈良法師が戦負て落ける時、ある僧坊へ走り入て見れば坊主かと覺しくて白髪なる僧有と書り。此僧坊のあるじかと覺しくてといふ事也。北條九代記には、住持の僧と覺しくて眠り居たる其前に物具をぬぎ置キと書り。是にて坊主と住持の同じなる事明也。

非人^{ひにん}ヲ

ホイト

乞人^{こいにん}の横訛^{よこなまり}なるべし。

ゑた^えヲ

らく

江戸にてゑたの居所を皮屋^{かわや}と云。

癪病^{さくびやう}ヲ

ドス

かたひと云がよし。

げかん^げヲ

へボ

げかんの病を移る事を庄内にてふん付たと云。

一 物の名は其國其所の土産^{みやげ}を以稱とする事故、都鄙の善惡はなき事なれども、薪はいづくにても八尺木と心得、焼炭^{たきすす}をかたすみとなへなどすれば笑るゝ事故、此等も大抵江戸の通用を合點して居るがよき也。薪をば惣じてまきといふ。庄内のてうなはまきわり也。木小屋はまき部屋也。柴をそだと云。庄内にて菅^すの臺炭^{たいさん}、櫛引炭^{くしひきさん}などいへば、江戸にては熊野炭、かくだい炭などいふ。ほくちなども庄内のやうなる朽木の火口^{ひぐち}はなくていちびがら也。

とうしん^{しん}ヲ

とうすみ

酒田詞にとうしみといふは却てよし。シのかなをみといふは古き詞也。

○つれ／＼草放免のつけものゝ段に、紺の布四五反にて馬を作りて尾髪にはとうしみをして

と有。

ふすまヲ

ふかす

からこ共いふ。庄内にてさくづとも云。さくづ袋はからこ袋也。

ぬかヲ

こぬか

手水に用るはぬか袋也。庄内にてはあらぬかをぬかといふ。

芋ヲ

あさいと

麻をはぎて作りたる糸なれば、あさいと悪しからぬやうなれど江戸にていはぬ詞也。江戸より來れる人庄内にて下女を呼び、うまぬ芋をもてこいと云たれば、馬の尾をもて來たりといふ咄も有。

○蟻川知昌が妻の歌に、あさいとの長く短くむつかしやうむの二つをいつかわすれん

をこけヲ

をぼけ

芋桶なれども江戸にてヲゴケと云。

藏半紙くらはんしヲ

大ちりおき

江戸にて半紙ともいふ。庄内にて半紙といへば半切紙の事とす。江戸にて半切紙の事を巻紙といふは無理なる詞也。つがぬうちは巻紙といふべからず。此類皆難波ななばのあし也。又町人などに半紙を御藏半紙ぐらはんしといふ者あり。是は中國邊の大名土産どさんの半紙を大阪に出し、江戸の爲替金を借入るゝ家多し、其金子の調達せぬうちは半紙を藏積にし置て金主に渡さず、夫故京大阪にては此紙を大名の物と心得てお藏半紙といふ。其詞自然と江戸に移りて、たま／＼は御の字を付るも有也。

そひがみヲ

なかはう

江戸にてしやうしがみといふは下賤の辭也。ちりがみといふもよし。

西の内ヲ

もくろく

奉書ほうしよかく紙を奉書といへば、目録を書く紙故もくろくと云もよからんなれど江戸にて通ぜず

のり入ヲ

杉原

上方にては杉原といへど江戸にて云はず。

よし野紙ヲ

あざふ

一 だいはうと云紙江戸になし。岩城紙似たるものなれど異也。中^{なか}はうに對したる大はうにや。最上^{いざな}の地名にも聞及ばず。

はうれいわた

くりわた

○林未央曰、はうれいはばかしたる綿の名にて、木わたは諸國共にくり綿といふにや、備中繰綿など書付來る。雄管て硯の海といふ繪本を覽るに、ろくろのやうなるものにて綿を製する圖有。繰て製する故の名なるべし。江戸にてはばかしたる綿ばかり賣買してきわたを取さかさぬ故、おのづからくりわたの名をば知らぬやう也。

綿をばかすチ

ホカストスム

ボカスとはボヤカスと云事也。ボの字を清て唱ふれば聞えぬ詞になる也。綿にかざらずボカスと云詞多くつかふ。

茶入チ

茶壺

茶壺とは葉茶壺^{はちやづは}の事也。挽たる茶を入るゝ器は茶いれ也。

花生^{はなせい}チ

花立

茶の湯者は生^{いけ}るといへばはや人作^{じんさく}にかゝるとて花入^{はないれ}と云。いはんや立るなどゝ云詞は殊に嫌ふ也。

火入チ

火とり

香の道具には火取といへと、たばこ盆へ付るのは火入^{いれ}也。

はいふきチ

たんはき

すいがらチ

ふきから

はいチ

あく

灰を煎じたる汁はあく也。

ちうのうチ

火かき

わんチ

じやうぎ

庄内にてわんやじやうぎとふれありく。ある人問ふ、わんとじやうぎの差別いかん。答て云、直段^{たか}の貴きはわん也、賤^{でず}きはじやうぎ也と。亦滑稽也。

○甲陽軍艦出軍の法度書の内に、定器の外椀折敷以下無用の荷物帶來る事禁制と有。客用の

椀折敷に對して、自分の食用に當る常の器といふ事と見ゆれば、此商人が椀の下品なるをじやうぎと稱る事尤當れり。

じきらうチ

小田原

小田原食籠といふ物有と見ゆれど江戸にていはず。

○兎園曰、大器ト云モノ也ト。

めんつうチ

わつは

大たらゐチ

はんざり

桶チ

こが

すへ風呂チ

すいふろ

風呂は家の内仕付たるもの也。假にすへる故すへ風呂也。持佛堂と同じ義也。然るに興原先生の養生訓に、世俗に水風爐とて大桶の傍に銅爐をくりはめて、水ふかく入て火をたき、湯をわかつて浴すと書れたるは、さすが博洽の翁いかなる粗相にてか有らん。屋風呂也とて水よりわかさぬ湯はなきものを。

ひしやくチ

ひさく

○和名抄に杓の字を比佐古とよませ、つれ／＼草に古きひさくの柄有やと書り。

かひげチ

かひぎ

搔筭也。水湯をかきくむ筭也。

小刀チ

はんさし

酒田詞にうすばといふ。薄刃は庖丁の名也。ほうてうを酒田にてホチャと云。

のこざりチ

のこすり

むかしはのぼざりといへり。上セ切ルの義也。

機具チ

はたご

釣道具チ

ぐ道具

釣を略してぐとばかり云は片言也。酒田詞にやみと云。釣竿をやみ竿といふ。やめぐと云もの有を詠れるなるべし。

びくチ

はげご

鳳巾のいとめチ

つもり

松飾のくまびきチ

けんだい

つまみチ

御手かけ

くひつみと云もよし。女の詞にはうらいと云。惣じて祝儀の詞づかひは男女よほど異也。習得て知るべし。爰に略す。

のぼりチ

こばた

ちよとしたる印に付るものは小旗也。五月のは幟也。

まとひチ

火じるし

高てうちんチ

まとひ

夜の纏には挑灯を用るといふ事兵學の習にあるより云來れるなるべし。

一 馬上挑灯を馬上とばかり云て通するは片言なり。庄内には此類の片言多し。ひたし物をひたし、朝鮮人參を朝鮮、白砂糖を大白の類也。

一 庄内にて人形をもひなといふ。雛とは内裏雛にかぎりたる事也。上巳前におひなや／＼とふ

れありくを呼で見れば土人形也。又ヒイナとイのかなを出す、惡し。俳諧などに詞の足らぬ時イの假名を出す事あれども好まぬ事とす。

小石チ

いしなご

いしなごとは小石を投て落さす手にとり請る戲にて手玉の事也。庄内にてだんまといふ是也。是を石なとり

共いふ。赤染衛門が家の集に、石なとりの石めすを參らすとて有。(榮華物語に、つれ／＼に思召さるゝ目などは、おまへに召出で、ごすぐろくうたせ、へんをつかせ、石なとりをせさせて御覽じなど云々。)又西行の歌に、

石なこの玉の落くるほとなきに過る月日はかはりやはする

などよめる、手玉の石の隙なく落來るを云也。然はナは投の字にて、コはぶらんこ、なんこなどのコにて講字也。遊戲に人の集るを云。庄内にてそれを惡しく心得、石をいしなとし、コの字を小石のコとしていへる也。奥州に石な坂といふ地名あるは、石を打あひなどせし所にてもあるにや。

クイナ

つくし

これは落標おちづくしを誤りたる詞也。落とは水の深き所を云。ツは休字やすめじにてクシは串也。船の通路を知らしめんため落おちに串を立て標しるしとする也。ツのかなを休ること遠國さほつくにうへつかた上方秋虫あきむし蟋蟀せせ時風ときかぜの類、何ほども有例也。其休めがなを字訓に込め、標をくしと誤て、杭の訓にしたる也。

ゆさチ

いじめ

文字には龍車とかく。ゆさぶる故の訓也。

とくりチ

すゞ

ごまめチ

ほしいはし

年始の祝ひには田作りとよぶ。節分の夜にごまめの頭をさす事江戸にてはせず。赤いはしに限りたるもの也。是も干鰯ほしほにこと名付て同物とする故の誤也。

ひしこチ

小いはし

庄内にて鹽辛しほからにしたるをひしこと心得たるは間違也。

かつほふしチ

かつふし

たにしチ

つぶ

海に辛螺にしといふ貝有。田のにし貝といふ事にて田螺たしとかく。

〇つれく草抄物に云、へなたちの事今金澤にて尋ればバイといひ、又つぶともいふ。兼好34が時にはへなたりと云けるにや云々。此説に據れば、關東の海にはバイの事をツブといふと見えたり。

にしんチ

にし

これは片身かたみづくにして肺ひものとする故二身にせんの訓有。文字には鯢也。

さよりチ

もじろ

皮はぎを

馬づら又かうぐり

かいづチ

しの小だい

あかうチ

はちめ

もうほチ

てんこ又どうこ

あいなめチ

あぶらこ又しんじやう

ひらめチ

まがれる

小鯉を庄内にてヒラメと云は誤也。惣じて鯉類の名江戸庄内よほどの違有。細には雄もしらす。

生盛鱈を

さし身なます

煮こじりチ

こじり

白味噌チ

料理みそ

粕入の汁チ

どぶ汁

一 うどん蕎麥切の汁をたれといふ事江戸にて通ぜず。是は味噌の煮汁を桶へたるゝ故の名なれど、江戸にては一切たれの場へ醬油をつかふ故たれといふ物を知らず。たまりは味噌なれど、是も製方たれとは各別也。

一 ざうするを庄内にてみそすといふはおかしきやうなれど、糝の字ミサウズと訓じたればよき詞なり。江戸にては通ぜず。

一 江戸にてばうたらと云は遠海にて取たるしやうたいなき鱈の事にて、庄内のすけたう鱈と云に同じ。庄内にては丸乾の鱈を棒鱈と云。何も所詞なれど、庄内の唱字義には叶へるやう也。

江戸にて酒醉をばう鱈といふもたはいなきの譬也。又酒醉といふ詞も江戸にて云はす、酒の醉なま醉など云。

つくいもチ

やわたいも

さといもチ

いもぢ

酒田にていものこといふ。

とうのいもチ

いもがしら

芋魁はつれ／＼草などにも出てよき詞なれど江戸にて云はす。

すいきチ

からとり

いんげんさゝげチ

なたさゝげ

とうがらしチ

なんばん

ふきのたうチ

ばんかる

みつばチ

みづは。

唱は同じなれど清濁都鄙の別有。みつばぜりといふもよし。

じんばさうチ

ぎばさ

年始の祝ひに用る時はほんだはらと云。

かやチ

かやのみ

じゆくしチ

じゆくしがき

熟柿にてすみたる事をかきは重言也。

○林未央曰、今川義元討死の前駿河の童謡に、熟し柿く鳴海の果そかなしきとうたへり。

ゑのきチ

ゑのみの木

あをきチ

あをきば

かしはチ

かし

かしは檜也。枹とは大に異也。庄内にて三ツかしの役所などいふ、訛也。かしは餅にて合點すべし。

にはとこチ

カイくラウ

けいたうチ

けとぎ

鶏頭花を訛れる也。

はうせんくはチ

れんぐは

まこもチ

がつぎ

かつみの横訛也。浅香の沼の花がつみは庄内のガツギなるべし。

一 はこべとあさしらげは江戸庄内の唱あちらこちらなり。是は江戸のが誤にて、鳥に飼ふのはあさしらげ、かたばみの形したるがはこべ也といふ。

さなづらを

黒ぶどう

茶のにばなチ

出しばな

すゝりだんごチ

うきふ

うきふといふ菓子別に在。

しるこ餅を

あづきもち

小豆を付たるは小豆餅也。ことは小豆の事也。こしこの類にて知るべし。それを庄内にてこしこ小豆と云は重言也。小豆を汁にして煮たるといふ事にてしるこ餅也。又女詞におせんぎ

いと云。是は早速に出来るといふ義にて自在餅なるを、めでたきことばに轉じて千歳といへる也。

○兎園曰、神在餅なり。出雲國にては、十月朔日より晦日まで毎朝餅をつき、小豆にて煮て神へも奉げ、家内の男女上下これを見て朝飯に代ふ。神のましますうち製する餅にて、出雲一國の唱なるが他國へも移れる也。

あんくるみチ

ござんぐるみ

あんころは下賤の詞也。

ねりもちチ

あんびんもち

あんびんはある名なれど餅が重言也。ピンは餅字の唐音にて、あんを入たる餅といふ事也。江戸にてはあんびんとも云す。

しんこチ

つき返し

大ころばしチ

おこし米

ほしうとんチ

ひのうどん

△かびのさすチ

○かぶける

○ねづけも悪し。

△飯などのすへるチ

○すれる

一客に飯を強んとて亭主の鉢に立を江戸にて亭鉢と云。庄内にてはなつ鉢と云。酒田詞はお立也。

△とんばうチ

○どんぼ

△てうチ

○べつたう

△はたるチ

○ほうたろ

△なめくじチ

○なめくじら

△かへるチ

○ピツキ

△ひきがへるチ

○ふるた

△ちんころチ

○いぬこ

上方にてはるのころと云。

△猫のさかるヲ

○をだける

△ばつたヲ

○ぎす

きり／＼すを江戸にてかうろぎと云は訛也。なくや霜夜の歌にて明也。

△氷ヲ

○しが

△こほるヲ

○しみる

子共の霜解を庄内にてしみどけと云。

△つらゝを

○しがゞさがる

△どろヲ

○ごた

△ぬかりみヲ

○のたられぬ

△水などの潑たるを

○ちよかいになる

如海になると云事なるべけれど通ぜず。

△じめ／＼するを

○やばちひ

重田玄作曰、何としても江戸に當られぬ庄内詞二つ有。ヤバチイとチクネルと也。又江戸に

てヤツカムといふ詞庄内に當る詞なしと。げに此説の如し。じめ／＼するは庄内にてしめは
ひとといふに當りて、やばちひは少し意味異也。加茂今泉邊の濱通にては、むさくきたなき事
をやばちいと云。江戸詞のやつかむは物を妬むやうなる事ながら、庄内に的確の詞なし。ま
んきにても有んか。

△つめたひヲ

はつこひ

江戸にてひやつこいとも云。ヒヤの切は也。

あたゝかヲ

あつたか

あたゝまるヲ

あつたまる

あつひヲ

あつちやい

ぬる湯ヲ

ぬるま湯

あかりヲ

あかる

やはらかヲ

やつこい

埒もなひヲ

もじかない

はうらつなチ

とどりがたい

見だてないチ

かつぞべない

しわひチ

ねつい

きれはの悪しきをネクツなどいふ詞あるより吝嗇なる事に用るにや。

あぐみはてたチ

しあましはてた

きのとくなチ

もつけな

音物など得て痛入たるをもつけなと挨拶するはぶ仕付なる詞也。物怪と書て怪異變災の義也。

きもをけすチ

きもをつぶす

たまげた、のけぞつたの類殊に聞にくし。

○平家物語には、きもたましゐるもきはてと有。つれ／＼草には、各きもつぶる／＼やうに争ひはしりのぼりてと書り。

おびへるチ

おびける

おぼけたは猶惡し。

見ぐるしいチ

見ぐさい

多いチ

たんと

羌維膽斗の語よりして大なる事を云と辯すれども牽強の説なるべし。

たくさんチ

たつくさ

出るチ

出はる

並々より進むを出張るとは云也。

出来たチ

出た

蚊が出た、蠅が出たはよし。細工が出た、普請が出たの類惡し。火事も江戸にては出来たといへど、是は出たの方然べき詞なり。上方にてはでけたと云。

をこるチ

をきる

朝起るはよし。癖がおきる、火がおきるの類惡し。

はへるチ

をへる

霍生で荒たる宿のうれたきはともいひ、波のうね／＼をい茂るらんとおもたれば惡しから

ぬやうなれど、江戸にてをへるといへばいな事に聞えて笑を取る也。

あをになるヲ

あをのけたま

うつぶすヲ

のたばる

すはるヲ

ねまる

寝蹲ねうつくまるの略語とすれども通ぜず。庄内のねまりだこはかしこまりだこ也。ねまり角力かくりきは居角

力也。犬子のねまるはしこりのゐる也。

○合類節用云、蹲踞とんくネマル。

いけむヲ

ねつこばる

まんがちヲ

ませがう

のけヲ

しやれ

江戸にてとけと云はいやし。

こぼすヲ

まける

大雨などをまけるやうに降るといふ。古きさうしには移すが如くふるといふ。似たるやうに

て詞の雅俗いかにぞや。

○伊勢物語に、雪こぼすがごとふりてひねもすにやまず。

もつヲ

たがく

かつぐヲ

かつねる

とらへるヲ

しめる

帯しめる、垣しめるはよし。笠しめる、とんばうしめるなど、捕る事にいふが惡しき也。雄

前かた

しめた手を大事にほぐす笠かな

といふ發句はくをしたれば、社中の人々それは庄内詞也、握る手をとすべしといふ。松籟庵の宗匠聞て、しめた手は捕へたる手にあらず、握りしめたる手なれば苦しからず、握る手としては句ぬるくなると被申き。元來雄が心には庄内詞にて云たれど、宗匠の取なしにて尤らしく成たり。

すてるヲ

うたる

ひつたくるチ

ひつゝなごく

ひつかくチ

かつさばく

つめるチ

しねる

引づるチ

引じる

酒田詞のふくづるはいよく賤し。

からげるチ

からがく

ゆはへるチ

たばねる

把にする故よきやうなれどもゆはへるの方よし。たばねのしと云んよりゆひのしといふべし。
ゆひわたも同じ。

ほるチ

ほじくる

草木をほるチこぐと云惡し。大なる木を根こぎにするとはいふ、庄内にてはせきちく姫ゆりなどの草花までこぐと云はしたゝかなる詞也。日本紀に掘の字をネコジと訓ぜり。ネコギはネコシの横通也。

こはれるチ

ぶつこれる

いたむチ

やめる

虫がやめる、腹がやめるの類也。虫のかぶると云も關東詞にて上方の人は笑ふ。かぶるは噛也。腹の痛む事臍脘を虫が噛るにてはなし。血脉の滯りて通ぜぬ所が痛む也。故にイタムと云字は疔に甬ヲ作る。

腹かはるチ

腹がくちひ

腹がへるチ

腹がすく

女はひもじめと云べし。すくはいやらしき詞也。

腹を立チ

こさいやく又
こせなやく

しかるチ

こすく

しかるゝチ

けちめくふ

いひふくめるチ

くたゝめる

御目にかゝるチ

御目にかける

御目にかけるとは進物などの事也。庄内にて始て御目に懸かきましたなど、出會であひのうへを云。

おそろしいヲ

おかない

せつないヲ

こわる

こわるとは怖おそしいと云事也。庄内にてこわい仕事じや、こわい役じやなど、せつなく大義なる用とす。上方にてはしんどいと云。

くたびれたヲ

てきない

かけるヲ

はしる

走の字にてはしるはよけれども江戸にて云はず。

つまつくヲ

けつまがる

○未得が集に、まりこより野邊にかゝりてゆく人のけつまつきてや膝ひざをするらんといいひたれば、けつまつくは苦からぬやうなれど、短くつまづくにてよかるべし。

のらつくヲ

のめくる

くるふヲ

はこる

けんくはヲ

いさかひ

いさかふと云詞は源氏物語などにも多く出て悪しからねど、江戸にては少しの争ひもけんくはと云。上方にてはいさかひともいふ。

わるさヲ

わすら

さひしいヲ

さむしい

(サモしい、サマヘー)

ねむいヲ

ねむたい

小夜ふけて今はねむたく成にけりなど、古の御製にもあれば悪しからねど、みじかくねむいがよき也。

けむいヲ

けむたい

詞を無用に長く云たがるは庄内のくせ也。輕かろいを輕かろこい、酸すいをすかいの類也。

かゝはゆひヲ

かゝぼちい

くすぐたひヲ

こそばたい

酒田にてくすぐる事をごちや／＼すると云。いかなる義にや。

うらやましいチ

けなりい

好ましいと云詞も江戸にて多くいはす。物語類にこのもしいふ詞は見えたり。

實にするチ

ほんにする

ほんの事などはよし。

知て居るチ

おぼへて居る

前かた見つ聞つしたる事をおぼへて居るはよし。合點で居るをいふが惡しき也。

嬉しがるチ

おもしろがる

能歌舞伎など見て面白がるはよし。物など貰^{もらひ}能き事のあるをば嬉しがると云べし。

あそこチ

あそこ又むかふ

むかふとはさし向ひたる所ぎりの詞也。庄内にてはどこまでもむかふといふ。

すみチ

すま

すまこ、くらすまなど。

したゝかチ

しこたま

すきとチ

ねつから

上方にはねいからと云こと葉有。

ちやつと

ちよこひこ

ちやくともよし。

○奥津長賢曰、チヨコヒコはチャツトの義に非、セツ／＼タビ／＼の義也。今からはチヨコヒコトコイなど云、観るべし。チャツトの庄内詞はチャカヒカ也、チャツカヒカともいふ。

ゆるりとチ

べんと

ふとチ

ひよつと

○金類節用云、剽ヒヨツト、票標並同、勁疾輕卒之義。

とつはくさチ

どつてして

どふしてチ

なしたつて

なぜチ

なして

けすチ

きやす

きへるはよし。ぬりきやす、きやし炭の類悪し。

やつはりチ

やつはし

はじめチ

はしめトス

むしやうチ

めとろく

いくらチ

なんぼ

なんばうおまへがなど、云はよし。物の直段を問ふ時なんばだ、なばだばなど悪し。

かうしたたちト云事チ

かうしたたつ

かうした事じやト云事チ

かうしたごんだ

かうじやよあゝじやよト云事チ

かうだてば
あゝだてば

昨日チ

きんな

一昨日チ

おとてな

江戸にておとつひといふは賤しく聞ふ。庄内にて一昨晚をさきの晩と云、通ぜぬ辭也。

明日チ

あした

ひるチ

ひるま

よるチ

よんま

夜の内よりと云事を夜のたま、悪し。

大としチ

としや

年の夜といふ故よきやうなれどもとしやとはつめず。大晦日と云もよし。

一 たゝむ詞には殊に庄内の聞にくき物いひ多し。これを連語とも、形容字ともいふ。大概を左に記す。

ぼと〜チ

びと〜

ぐよ〜チ

もつ〜

くよ〜チ

ちぶら〜

ぐしや〜チ

ぐちやら〜

おす〜チ

おかな〜

のろ〜チ

あやういふちふ

ぐな〜チ

ぐならしやなら

づう〜チ

のけ〜

江戸にてしやあ〜とも、庄内にてふて〜しい共。

きり〜チ

かちま〜

きわ〜しるチ

けち〜しる

いじ〜しるチ

しよね〜しる

にこ〜チ

にこかぎ

まじ〜チ

またら〜

ゆす〜チ

よつら〜

あんかんチ

あけらほん

此外幾等もあれども事繁ければ洩しぬ。

一 庄内の詞はすべて長くして聞にくし。たとへば其扇こゝさよこしてくれちやといふを、江戸にてはその扇くれなにて済む。やれ〜もつけなごんだちやなどいふを、江戸にてはを〜しや

うしと云てすむ也。其外までチまちれ、トビヤレを飛やれの類、短くすむ事を一つ宛かなをかぞふる故耳に立也。

○つれ〜草に云、たゞいふ詞もくちおしうこそなりもてゆくなれ。古は車もたげよ火かゝげよとこそいひしを、今やうの人は、もてあげよかきあげよといふ。

一 太郎右衛門次郎兵衛などもたる右衛門じろ兵衛にてよきを、たろう右衛門じろ兵衛とかぞへて唱る故甚聞にくし。諸物などには文字の通りうのかなを出す。又太郎五郎などゝ下わ付く郎はのべる事勿論也。

一 四郎兵衛七郎兵衛へ十郎兵衛の類すむは悪し。びやうへと濁るがよき也。四郎へい十郎へいなどよべば平に間違也。上方筋にては儀兵衛嘉兵衛などさへびやうゑと濁る國風も有。江戸にて此類は清て唱ふ。

一 田舎の人は事物によりくせ稱來といふ事あるを知らず、一切文字の通にさへ稱れば誤なしと心得、たとへば行燈をあんどう、溫飴をうんどん、交着をまじへざかなの類何ほども訛有。書物をよむにも此心得違にて人に笑るゝ事多し。學得てしるべし。

一 庄内詞の中殊に聞にくきは、あそこへこゝへといふ事をあそこさこさといふさもじ也。詞の末のちやもあしけれど、さもじよりは耳に障らす。

一 庄内詞の鼻にかゝるといふは、カキクケコタチツテトのかなを濁る故也。其中にまねくチまねぐ、夕方を夕がた、織田をおだの類はしかと濁るの訛にて、大慶をたいけい、焼香をしやうがう、義經をよしづねの類は中段の濁り也。前のしかと濁るよりも此中段のにぎり別して聞にくし。それ故上方人に對して市右衛門と名のれば意地右衛門殿かと問返され、八兵衛と名のれば恥兵衛殿かと疑ふ。是は上方筋に中段の濁といふ事絶てなき故、しかと濁りたるかなに聞る也。書をよみ音曲などには殊に慎むべし。

一 庄内にて小き座敷をも廣間といふ。笑るゝ事也。廣間とは歴々の取次の間をいふ。屋敷をせどう云事俳諧にも

せどはまた下の卷有若葉畑

麻殻をふみ折るせどの月見かな

など云て通する稱なれど、片田舎の裏地の事にて、御城下の土屋敷などにはいはぬ詞也。をし入

ををたうこといふ、誤也。だうこは湯をわかす物也。敷寄屋のたうこは別に習あり。床の間といふも庄内風也、床にてよし。さうじも江戸にて通ぜず、まきべやの類也。跡戸をさしかけてゆくと江戸にて下賤の一寸戸といふ。庄内にては下賤の三寸明けといふ。都鄙にて二寸違たるもおかし。

一 芝居の棧敷を高さじき、切落しを下棧敷と云、江戸にて通ぜず。上方には上棧敷下棧敷の名目有。

一 庄内にて純子金入の類の呉服を買ふに、一寸四方を一坪と云て直段する事江戸にてせず。渡り物はかねざしにて何尺何寸と幅を以直段する也。又四方をしはうといふはよき稱なれども、江戸にてはよはうといふ。

一 東風をだし、南風をくだり、北風をしもかせ、西北の風をしもになど云は西海の國詞也。江戸にて西南の風を富士南といひ、京都にて東風を比叡下しといふに同じ。他國にて自國の詞をつかふべからず。

一 長降するを江戸にて長しけといふ。それよりして肴のなきをもしけといふ。曇たる空をいつ

にてもしぐるゝといふ。庄内にて日より悪しきをあれる、こちるなど云、江戸にて通ぜず。
吹雪をふき、ぬれ雪をばた雪なども庄内詞也。

一 江戸にてはキナクサイと云。庄内にてはヒナクサイと云。いづれか是なるにや、未つまびらかならず。

一 江戸にて祭とばかりいふ時は山王か明神隔年の祭の事也。市とばかりいふは浅草の年の市也。其外なれば何の祭何の市と名を指ていふ。又からみといへば大根に限る。大根がらみといはず。此等の事もしられれば迷ふ事有。

一 江戸にて女の前帯といふ事遊女にかぎりたる事にて賤しとす。奉公人など殊に慮外の一ツ也。櫛をさす事も奉公人は慮外なりとてせず。奥勤の女などは大かた片髪に髪かきをさす也。

一 庄内の女は夏日の炎天にも足袋をはくは、いかにも用意有てよき事なれども、江戸の女は素足の白きをひけらかして夏足袋を笑ふ。ひとり賢からんよりは、其所の習に従て然るべき也。

一 女のたしなみに大和詞といふ事有。これは梓に行れて世にあまた有るものなれば今爰にのするに及ばず。奥勤の女房達は得て大和詞をつかふものなればよみて知り置べし。江戸の事のく

はしき草子は菊岡沾涼が作れる江戸砂子五冊有、これ又よみて江戸を知るのよき寶也。

一 江戸の詞にも訛れる事數多あれども、其所の習しと成てこれをあやしとも覺えず、とがむる人もなくて済居る也。其一ツ二ツをいはゞ、

元結ヲ もつてい

月代剃さかやきるヲ 月代する

あそぶヲ あすぶ

すめるヲ すべる

紐ヲ ひぼ

見付ヲ めつける

見つかるヲ めつかる

見付ものヲ めつけもの

かたふくヲ かしぐ

庄内にてかたがると云も悪し。

をそはるゝテ

うなさるゝ

うならせらるゝをつめたる詞也。庄内にてをなさるゝと云は殊に惡し。

○葬の卷に、御いらへきこゆとおぼすにをそはるゝ心地して、女君のなかへはとの給ふに。

虚病きびやうテ

けびやう

晦日つごもりテ

つもごり

鮭さけテ

しやけ

庄内にていほといふ、通ぜず。

ざこざこテ

じやつこ

美作餅みまさかもちテ

いまさかもち

ちさちさテ

ちしや

大根だいこんテ

だいこ

冬瓜とうがんテ

とうがん

此二ツは俳諧などにもだいことつめ、とうがんとはねて通用す。

観音くわんおんテ

かんのん

庄内にてくわんをんといふは例のよみくせ知らすが文字自滿也。上をはぬれば下はのみて唱るが習也。江戸にてはクハのかなを惣てカと云。かし、やかん、すいかんの類也。所詞にて皆斯の如し。

どうどうけテ

ちやうけ

童戯の文字にて兒童こどもの戯也。江戸にてちやうたんするともいふ。

増上じやうじやう寺テ

じやうじやう

ざうじやうりりテ

じやうり

有もないせぬテ

ないもせぬ

四角しかくテ

しかく

丸いのイヲ四角に付るは無理也。

けつけつくテ

けつか

結局は物の終をいふ。むかし結句けつこ却而かへつてといふ詞有しを、後には結句とばかり略し云て却ての

義に用ふ。大平記に、高の師直が御所を圍る時、足利左兵衛督直義のことばに、奢侈の鼻惡法に過るに於て、一旦誠め沙汰すべきよし相計ふを傳き、結句却て狼籍を企る事、當家の瑕瑾武略の衰微、これに過たる事や候べきと書り。師直等が鼻惡を誠んと相談するを傳聞て、あげくには却て謀叛を起せりといふ事也。

此外にも江戸にていひ習したる惡しき詞數々あれど、爰に其大概を擧たり。上方詞とてもまた是に同じ。されば都也とて必しもかなを訛らざるには非、鄙にも古雅なること葉の残れるはた多ければ、一概には論じがたけれど、此叙文にいへる如く、其郷さきに入ては其郷の習しに従ふを女の直ただなりとはすべければ、字義假名づかひの是非をさし置て、たゞむかふ人の耳に新らしからぬ辭の用意、つね／＼あらまほしき事にこそ。

明和四年丁亥如月上旬

堀さきかつ識

書きそへ

漢萩一卷、家祖季雄の小著。柳田先生の委囑に由り自筆本より寫取りぬ。

序文に見ゆる如く婦人に示し、書なるためか漢字の多くに振假名あり。今煩を避けて其幾分を残し削除したり。其他萬葉假名を平假名に、漢字の行草體を楷書に、すべて小圈にて表せる句切の或ものを點に、漢字の下のを々に改め、又解説の語句中偶然の誤脱と思はるゝ假名二（脱一誤一）と、若干の濁點及び句讀とを訂補したる外は、江戸庄内兩語の濁點の有無、送假名の附け方より、假名と漢字との區別、片假名草假名の混用、直書側書の別等に至るまで、悉く元に従ひたり。送假名に前後不一致のものあり、假名に失當と思はるゝも少なからねど、其等も改めず、なるべく原文の佛を存せんことを務めたり。

行間及び欄外處々に見えたる追書は、本文中適當の處に括弧を施して挿み、或は其項の末に○を附して掲げた。追書には句讀點なきを、本文の例に倣ひて加へたり。

本書は郷人に江戸語の一斑を示せるものなれば、從て兩語の對比にも庄内の方を先づ出す方が妥當なりしならんか。庄内方言の表記方については必ずしも精確なるを要せぬわけなれど、之を遂に、本書に依りて庄内語を見るゝ人に對しては、注意を乞ひたしと思ふ事種々あり。

其一、音聲を假名に表する事の困難なるより、唯當面の事物を喚起し得る程度に於て、大約に記されたるにあ

らぬかと思はるゝもあり。例へば、「にはとこ」のカイカイラウ(ケンケロ)、「播箭」のカイギ(ケイギ)、「ふきのたう」のバンカイ(バンケ)、「水などが澤山こぼるゝ事」のデョカイニナル(デョーケニナル)、「埒もない」のモジガナイ(モンジャネ)の類なり。括弧内は明治十年代頃の發音を標準に綴り試みたるなり。(如實には表し得ず。)長き年月の間に方言の生滅も發音の變遷もありしなるべければ、右の數語の如きも古今の變化かとも思はるれど、それも速斷し難し。予が年少の時、一友が、ゲルグト(蛙の子)の方言を東京人に云はせみたるにカヘルクトンと云ひきと語りしことありき。之に類したる表記が本書中に混在せずとは斷言し難きやうに思ふ。

其二、方言の特色は音勢(アクセント)に存する所多かるに、本書には之に關する何等の標識も無し。是も研究者の注意を要する一事ならん。例へば、「生れ子」のアカは、庄内語にては犬猫を呼ぶアカや「垢」のアカと音勢異なり。「遊女」のオバと「妹」のオバとも然り。「保姆」のモリも音調にて「森」と區別し得べく、「親類」のオヤコと「親子」のそれとも同じからざる類なり。

其三、同じ庄内方言にても、古今の差違の外、身分職業等に由りて異同少なからず。又方面に由りても相異なるは書中處々に擧げられたる酒田詞の例にても知るべし。然るに本書中此等の區別を明かにせざるも見ゆる様なり。二三の例を擧ぐれば、父親をダと云ふは、予が知る所にては百姓詞なり。町人間にてはダ、チャ或はダ、ハと云ひ、侍の家にてはオトチャ或はオトハンと云ふが普通なりき。士族の主人や子供が老僕などをダ、と呼ぶことも珍らしからざりしは、其者の身柄の言語を用ひたるならん。ハエゾ(生える)をオエルとは士分の者は云

はず。「昨日」はキンノ或はキノ、「一昨日」はオトトイと云ひたり。オトテナといふ語は聞きしこと無し。フツコレル(こはれる)はボコレル、見グサイ(見ぐるしい)は目グサイ、コソバタイ(くすぐたい)はコチバテ或はコチバテ、ゴサイヤク或はゴセヤク(腹を立てる)はゴシヤク或はゴサクが通常なりき。是等は時代の差異にもあらん。

トンテキ、ワニル、ノタラレヌ、ヒツ、ナゴク、メトロク其他如何に考へても思出で得ぬものも若干あり。是等は年と共に廢滅したる方言ならんと斷じ得る程の智識を有せざれど、少なくとも明治の代となりては多く聞かざりし語なり。細工や普請の出來上りたるを「出タ」といふ事は、仙臺邊の人がしか云ふとて笑話にせし事ありし程にて、予が知る頃には無かりしやうなり。

其四、促聲拗音の標識無くして、他郷人には獨立の假名と紛れはせぬかと思はるゝものゝ例、ベツタウ(蝶)、タツクサ(たくさん)、ハツコイ(つめたい)のツは促符にて、ヨツバリ(寝小便)のツは讀む假名なり。サベチヨ(口き)、デヨナメク(だてをする)、レングワ(鳳仙花)、シヤレ(のけ)、アツチャイ(あつい)のチヨ、デヨ、グワ、シヤ、チャは拗音、キヤス(消す)のキヤは二音なり。

本音と轉音との別の紛れやすき例は、小田原(じきらう)の原はワラにて、杉原(糊入の紙)の原はハラ、出る(出る)のハも本音の儘なり。

半濁音符の欲しきは、スツホツ、ミ(ほゝかぶり)、手ノコツハ(手の甲)、コツハ(こしやく)、ワツハ(めん

つう、シメホイ(じめじめする)、ヤツハシ(やはり)のへ、ホなど。又濁點の附落しと思はるゝもあり。以上は筆寫の際思附きたる事の一端なり。中には表記上聊の用意を疎にせしため明確を缺きし憾のあるもあれど、編述の目的上それにも及ばざりしならん。今日となりては、時代の差異をも顧慮する要あれば、漫に加刪すべきにも非ず。要するに本書は、庄内語の研究資料としては語數も極めて少なく、記述上にも讀者の注意を要する點多かるべし。されど聊にても學者の參考とならん事は家祖の榮とする所ならん。予は郷里の習俗言語について何等調査考究をしたる事なければ、此に掲げたる卑見も蛇足兎角に過ぎざらんも知れず。婆心饒舌の罪は故人及び讀者の寛恕を請ふ。

著者 七代 裔

堀

維

孝

昭和五年二月下旬

「言語誌叢刊」發刊趣旨

言語誌叢刊

第一期刊行書目

- | | | | |
|----------------------------|-----------------------------|---------------------------|-------------------------|
| 三矢重松著
莊內語及語釋
(定價一・五) | 山口麻太郎著
壹岐島方言集
(定價一・〇) | 東條操編
南島方言資料
(定價二・〇) | 柳田國男著
蝸牛考
(定價一・八) |
|----------------------------|-----------------------------|---------------------------|-------------------------|

附
莊內方言攷
氏家剛太夫著
荻 堀 季雄著

莊內語及語釋



版權所有



第一刷

著者	三矢重松
發行者	東京市神田區區役所北中野町三番地 尾高豐作
印刷者	東京市牛込區早稲田車庫前 山田末一郎

印刷所

明立印刷株式會社

昭和五年七月五日印刷
昭和五年七月十日發行

定價壹圓五拾錢

發賣所

東京市神田區區役所
北中野町三番地

刀

江

書

院

電話神田(三三)二七八
一八九

刀江書院刊行書目

松岡 靜雄 著	日本古語大辭典 (語誌篇)	定價 送料	二〇 〇〇〇
松岡 靜雄 著	日本古語大辭典 (訓詁篇)	定價 送料	八 〇〇〇
松岡 靜雄 著	日 本 言 語 學	定價 送料	二 〇〇
松岡 靜雄 著	日 本 古 俗 誌	定價 送料	三 〇〇
伊波 普猷 著	琉 球 古 今 記	定價 送料	三 〇〇
伊能 嘉矩 著	臺灣文化志 (上・中・下)	定價 送料	一〇 〇〇〇
藤田 元春 著	日 本 民 家 史	定價 送料	六 〇〇
小田 内通敏 著	郷土地理研究	定價 送料	二 〇〇
井上 吉次郎 著	村 と 町 と	定價 送料	一 〇〇
菊池 慧一郎 著	獨修ラテン語初步	定價 送料	二 〇〇